

すべての子どもたちが輝ける未来を



*Anniversary*

**1994 - 2024**

ブレインヒューマニティー創立30周年記念誌



BrainHumanity

# 30th Anniversary

すべての子どもたちが輝ける未来を

## contents

Introduction	はじめに .....	03
	歴代代表挨拶	
Organization Song	会歌 .....	05
	「空色になったキャンパス」	
History	年表 1994-2024 .....	06
	BrainHumanityの歩み	
Memorial	追悼 .....	23
	長尾 文雄氏へ哀悼の意をこめて	
Contribution	寄稿 .....	24
	それぞれの時代をふり返って	
	〈登場順〉	
	・濱村 直之      ・大藤 泰生      ・能島 裕介      ・森山 隆一      ・安西 陽太	
	・石田 太介      ・近藤 絵美子      ・川中 大輔      ・倉谷 明伸      ・城戸 武洋	
	・新開 政雄      ・阪上 荘平      ・辰巳 真理子      ・山口 真史      ・北村 頼生	
	・田中 章雅      ・今井 悠介      ・鶴巻 耕介      ・箭内 佑己      ・雑賀 雄太	
	・井原 充貴      ・若松 周平      ・奥野 慧      ・北野 愛実      ・阪口 祐輔	
	・福井 邦晃      ・田中 遼太郎      ・松本 学      ・片岡 一樹      ・杉田 隼	
	・須澤 寛子	
Document	資料 .....	44
	ブレーンヒューマニティーならびに関連企業 経営指標(要旨)	
	歴代役員・事業部長など	
	事業部局の変遷	

※ 本書の記述は、原則として2024年8月までとした。  
※ 年号は西暦を基本とし、適宜、和暦を併記した。  
※ 用字用語は、原則として常用漢字、現代かなづかいとした。  
※ 人名・会社名は原則として敬称を略し、役職名は記述当時のものとした。

はまむら なおゆき

## 濱村 直之

関学学習指導会初代理事長



特定非営利活動法人ブレンヒューマニティーは、前身団体の発足から、2024年5月1日をもちまして創立30周年を迎えることができました。発足当初は学生4名の小さな団体でしたが、これまで延べ約1万名の学生達が活躍する場となりました。

前身の家庭教師幹旋団体「関学学習指導会」は、フランスのレジスタンス詩人ルイ・アラゴン(1897-1982)の作品「ストラスブル大学の歌」の一節である「教えるとは希望をともに語ること」を拝借して、活動のスローガンに掲げ、子ども達と「希望をともに語ること」を実践してまいりました。

前出の詩には、「友よ、何を、われらは何をなすべきか」ともあります。阪神・淡路大震災の発災直後から「われらが何をなすべきか」侃々諤々の議論を交わし、活動を子ども達への全人教育へと拡げていきました。やがて、特定非営利活動促進法(1998)の成立を機に、全国初の学生主体型NPO法人となり、不登校問題や貧困・生活困窮による教育を受ける機会格差の問題など、社会が抱える教育問題に逸早く着眼し、試行錯誤を繰り返しながらもその支援活動を展開してきたことは、「希望をともに語ること」「われらは何をなすべきか」が、当会の精神的支柱思想として、今日に至るまで脈々と受け継がれてきた証左であり、それらがこれからも後継されていくことを信じてやみません。

前身団体初代理事長といたしまして、関係各位におかれましては、これまで多大なるご協力を賜りましたことをこの場を借りて感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

関係者の皆様方の益々のご健勝と今後一層のご繁栄を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

のじま ゆうすけ

## 能島 裕介

関学学習指導会第2代理事長  
特定非営利活動法人  
ブレンヒューマニティー初代理事長



なにげない大学生の雑談から始まった団体が、いつのまにか30周年を迎えることになった。単なる家庭教師のアルバイトをするだけの集まりだったのに、阪神・淡路大震災がその方向性を大きく変えた。まだNPOという言葉もそれほど馴染みがなかった時期に、全国初の学生主体NPO法人となり、多くの方々の支えをいただきつつ、四苦八苦しながらその活動を継続してきた。組織が継続することは決して目的ではないが、多くの若者によってこの活動が30年も続いてきたことには大きな意味があると思う。

世の中には学生や若者が立ち上げたNPOはたくさんあるが、この規模でありながら、いまなお学生主体の運営をしている団体は数少ない。学生が起業しても、起業した学生が卒業し、年を重ねるといつの間にか大人だけで運営する団体になったりしている。大人が経営をしながら、若者が形だけの参画をしている団体もある。でも、プレヒューはそんな団体にはなってほしくないと願っている。

数年前にある人からユースワークの話聞いた。ユースワークには様々な定義があるが、その人は「若者の影響力を高めること」と表現した。その時、私が18歳の時からやり続けてきた活動がまさに「若者の影響力を高めること」だったということに気がついた。「若者なんて無責任だ」とか「学生には無理だ」などという大人たちの声に必死に抗ってきた。この組織の30年はそんな大人たちへの挑戦であるとともに、若者や学生でもしっかりと社会のなかで責任を負い、その役割を果たしていくことが可能だということの証明のプロセスでもあった。

証明の開始から30年が経過したが、まだその証明は終わっていない。もしかすると証明が終わることはないのかもしれない。ただその証明が終わるまでは、この組織は若者のものであってほしい。どんなに偉そうなことを言ったって、若者の雑談から始まった組織なんだから。

もりやま りゅういち

## 森山 隆一

関学学習指導会第3代理事長



設立30周年、誠におめでとうございます。この会を発足していただいた設立メンバーがいなければ、この素晴らしい活動はありませんでした。また、現在も脈々と続いているのは、30年の長きにわたりサポートして下さった皆様、そして子ども達と真正面から向き合った1万人もの学生の皆様のおかげであると感謝いたします。

民間企業の場合、会社の存続率は10年で6.3%、20年で0.39%、30年となると0.025%とされています。では、ブレンヒューマニティーが設立30周年を迎えられた理由は何でしょうか。

1. どこに向かっているのか(ミッション)を常に明確にしていること
2. 子ども達に対し、それぞれが多様な価値に触れ、選択肢を広げられる機会を提供することは、いつまでも色褪せない、魅力的なことであること
3. 全力で何かをやり切ることは、すごくしんどいことであるけれども、達成した時の充実感、爽快感が何ものにも代えられないこと
4. 組織、マニュアル、議事進行など、組織運営の基礎レベルが極めて高いこと

まだまだ、挙げ始めたらきりがありません。今、現役で頑張っている学生の皆様も、同じような体験をされているのではないのでしょうか。

米国の神学者ラインホルド・ニーバーは、「神よ、変えることのできるものを変える勇気と、変えることのできないものを受け入れる冷静さと、そして両者を識別する知恵をわれらに与えたまえ」という言葉を残しています。世の中は目まぐるしく変化し、子ども達の環境も変わります。何が正解かは分からなくても、いまいる学生の皆様と役職員、社外理事・幹事の皆様とで、30年間変わらない熱い議論がこれからもなされて、一人でも多くの子ども達に多様な選択肢をこれからも提供されることを心より祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

まつもと まなぶ

## 松本 学

特定非営利活動法人  
ブレンヒューマニティー第2代理事長



2024年5月1日に、ブレンヒューマニティーが設立30周年を迎えた。私は、いわば「中継ぎ投手で試合中の身」なので、この意味をまだ実感できずにいる。それはブレンヒューマニティーで現在活動している多くの学生たちも同じなのかもしれない。

ブレンヒューマニティーに出会って18年。36歳になった私にとって、ここは、人生においていくつかの大きな意味を持つ場所となっていることは間違いない。

中にいると毎年「今年は大丈夫だろうか」「来年はどうだろうか」「一緒に活動してくれる学生は来てくれるだろうか」という不安が付きまとう。

30回この不安を繰り返し、不安が杞憂に終わり、そしてワクワクに変わるサイクルを繰り返しているこの団体の在り方を心からすごいと思う。

前理事長の能島氏が、ある時のスピーチでピーター・ドラッカーを引用した言葉が頭に残っている。「私が13歳のとき、宗教の先生が、何によって憶えられたいかねと聞いた。誰も答えられなかった。すると、今答えられると思って聞いたわけではない。でも50歳になっても答えられなければ、人生を無駄に過ごしたことになるよといった」

その言葉をときおり思い出し、私自身は当然だが、ブレンヒューマニティーにおいてもその時々的大学生スタッフにとって、子どもや若者たちにとって、どのような場所として憶えられたいか考えてしまう。

創業メンバー、諸先輩方、後輩たちが紡いできた30年という長い年月に深く感謝したい。「抑えピッチャー」にならないように、40年め、50年めの未来を今の仲間と共に作っていきたいと思う。

ブレンヒューマニティーはまだ30歳。まずは、天命を知るまでを目標にこれからも爆走していきたい。



BrainHumanity 会歌  
『空色になったキャンパス』

作詞: 創立5周年記念パーティーに参加したみんな 作曲: 有本欣永/橋本崇 演奏: 加藤暢之/二上徹平/橋本崇/吉田督史  
編詞: 濱村直之 合唱: 永井俊広/三浦一郎



1. 晴れわたる空のした 夢色の虹かかった  
ひとつの輪になって あの山の向こうまで歩いていこう  
そびえ立つビルの街 壊れた<sup>またた</sup>瞬きのあと  
この指止まれで集まる 僕らで仲良くいこう  
この丘で 荷物を置いて  
寝ころんだまま 見上げてた空

流れ星のゆくえを 眺めるように<sup>あす</sup>未来を見て  
白いキャンパスに描いた 大好きな楽しい夢  
ただまっすぐに続く この道を歩いて行こう  
子供の頃に描いた<sup>えが</sup> 絵の景色に着くだろうか



2. 虹かかる空の下 あふれる光の中  
夢を語りあいながら いつしか時は流れた  
あかね色に 染まるあの丘で  
まばたきを忘れ 眺めてた空  
手を振る君のそばには いつも僕たちがいる  
一緒に流した涙を 喜びの声にかえて  
ただまっすぐに続く この道を歩いて行こう  
僕らの未来映した<sup>みらい</sup> 夢の続きを話しながら  
明日への思い つなぎ合わせ生まれた  
僕らの歌は響く 七色の風に乗って



こちらから  
歌を聴くことが  
できます



(※印 くりかえし)  
明日への思い つなぎ合わせ生まれた  
僕らの歌は響く 七色の風に乗って  
  
(※印 くりかえし)



# 年表

## BrainHumanityの歩み 1994 - 2024

History

BrainHumanity History

1994 1995

「みんなで家庭教師の派遣をやらへんか」

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスB号館。今と変わらず、後ろの席で眠そうにしている学生たちの集まりがあった。

「みんなで家庭教師の派遣をやらへんか」

1994年4月、ある青年の一言が、後に30年続く組織の小さな種となった。時代はバブル崩壊後。景気は上向くと思われたが低調のままで、社会全体が重苦しい空気に包まれていた。高いマージンを抜くような商売をする「大人」たちに反抗するかのように、学生にとっては高い報酬で、家庭にとっては安い月謝で学習指導をしよう—そんな4人の学生の思いが集まり、当会の前身である「関学学習指導会」が結成された。

しかし、現実の壁は高かった。広告を掲載しても反応は少なく、結果が出なければ意気込みも薄れていき、94年は歯がゆいまま過ぎていった。そんな中、運命は突然大きく動いた。

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県南部を震源地とする、最大震度7を記録した大地震、阪神・淡路大震災が発生した。

指導会メンバーも被災者となり、避難を余儀なくされた者もいた。

「避難所で夜遅くに参考書を広げて勉強している中学生の姿をテレビで見た。なにか俺たちにできることはないか」

彼らは顔を合わせて、自分たちに問うた。

そして、これまでやってきた取り組みを基に、無料の家庭教師派遣をやらうと決めた。その第一報が新聞に掲載された日から、事務所にしていたメンバーの1人の下宿先の電話は鳴りやまなかった。被災から時間が経つにつれ、遊び場や、遊び相手のお兄ちゃんお姉ちゃんがほしいといった声にも応え、手探りのままキャンプやピクニックといったレクリエーション活動を行っていくことになった。

ちょっとした思いつきは、多くの共感や仲間を生み出し、次第に引くに引けない状況となっていった。



1



2



写真提供:神戸市 3



4



5

**支援助**

**医療**

**教育**

**ホームステイ**

**催し**

**京都コーナ**

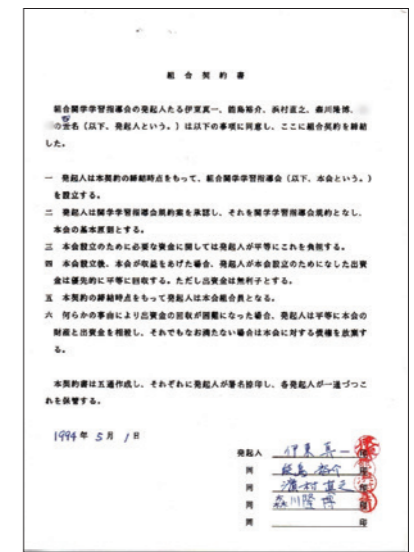
**寄付**

阪神大震災義援金 ありがとう皆さん

神戸新聞社提供(1995年2月24日掲載)

日付 主な活動内容

1994年 5月 関西学院大学の学生4人により「関学学習指導会」を創立。家庭教師幹旋事業を開始。



組合契約書

- 1995年
  - 1月17日 阪神・淡路大震災(M7.3)発生。写真3
  - 2月21日 被災児童に学習支援活動を行う「救援教育センター」を設置。無料家庭教師派遣活動を開始。写真1・6
  - 4月1日 被災児童への全人的支援活動を展開すべく、「救援教育センター」を改組し、「ちびっこ支援センター」を設置。
  - 4月1日～2日 「被災児童・生徒のためのセミナーキャンプ」を開催(於:関西学院千刈キャンパス)。小～中学生52名が参加。
  - 5月 理事長に濱村直之を選任。
  - 7月31日 無料家庭教師派遣活動を終了。のべ125件の無料家庭教師派遣に至る。
  - 4月～6月 「こどもの日ハイク」「ちびっこパーベキュー」「ちびっこオリエンテーリング」などの日帰りレクリエーション企画を開催(於:甲山森林公園、仁川ピクニックセンター他)。のべ109名が参加。写真2・5
  - 8月 「ちびっこサマーキャンプ'95」を開催(於:関西学院千刈キャンパス)。小～中学生20名が参加。写真4
  - 9月～10月 「ちびっこウォークラリー」「ちびっこパーベキュー」などの日帰りレクリエーション企画を開催(於:甲山森林公園、仁川ピクニックセンター他)。のべ98名が参加。

BrainHumanity History

# 1996 1998

## キャンプを中心としたレクリエーション活動を行い、被災した子どもたちを支援していく

学生たちの踏み出した一歩は、子どもたちだけでなく保護者にも受け入れられ、次第に大きな活動となっていった。新聞にも指導会の活動や歩みが連載記事として取り上げられ、認知度の高まりと共に、継続的にイベントに参加する子どもたちも増えた。

「キャンプを中心としたレクリエーション活動を行い、被災した子どもたちを支援していく」

子どもたちの楽しそうな姿と、自分たちが議論したことが具現化していく充実感のなかで、大学生、高校生を中心とする指導会メンバーは大きな手応えを感じていた。

「やり始めてから考えよう」「なんでもできる」。そんなポジティブで楽観的で自信過剰な意識、それでいて、あらゆるリスクを検討しその対策を練るという姿勢——、当会の行動指針が生まれ始めていたものこの頃であった。

一方で、活動の広がりと共に、子どもたちに寄りそう直接的な支援だけでなく、その活動を支えていくための間接的な管理業務も増えていく。それらを担い、多くのボランティアが集まることのできる場所をつくるためには、予算が必要である。また、指導会を立ち上げた主要メンバーにも卒業の時期が迫り、引き継ぎを模索するなど、継続的に子どもたちを支援していくためには多くの壁が立ち上がった。しかし彼らは、学生団体だからこそ柔軟な発想、徹底した議論を経て、基金の創出や、1回生への理事長交代など、指導会を存続させるための試みを続けていくことになる。

そして1998年3月、彼らの活動に呼応するかのように、特定非営利活動促進法(NPO法)が成立した。



1



2



3



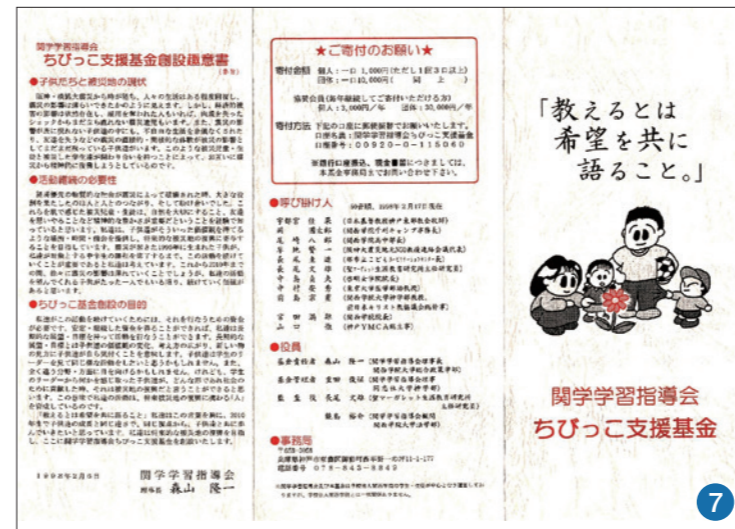
4



5



6



7

日付	主な活動内容
1996年	
3月~4月	「ちびっこスプリングキャンプ'96」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。61名が参加。
8月	「海洋冒険キャンプin小豆島」を開催(協力:Blue Beans Shore)。30名が参加。 「ちびっこサマーキャンプ'96」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。84名が参加。 <a href="#">写真2</a>
9月	理事長に能島裕介を選任。
1997年	
3月	「ちびっこスキーツアー'97」を開催(於:戸狩スキー場(長野県飯山市))。30名が参加。 <a href="#">写真3</a> 「ちびっこスプリングキャンプ'97」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。57名が参加。
7月~8月	「琵琶湖サマーキャンプ'97」を開催(於:同志社大学小松学舎(滋賀県志賀町))。48名が参加。 「ちびっこサマーキャンプ'97」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。59名が参加。 <a href="#">写真6</a>
9月	理事長に森山隆一を選任。 「家庭教師センター」を設置。
1998年	
1月	「ちびっこスキーツアー'98」を開催(於:戸狩温泉スキー場)。28名が参加。 <a href="#">写真5</a>
3月	特定非営利活動促進法(NPO法)成立。 「ちびっこ支援基金」を創設。 <a href="#">写真7</a> 「ちびっこスプリングキャンプ'98」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。39名が参加。
8月	「琵琶湖サマーキャンプ'98」を開催(於:同志社大学小松学舎)。32名が参加。 「ちびっこサマーキャンプ'98」を開催(於:関西学院千刈キャンプ)。56名が参加。 <a href="#">写真4</a>
10月	「仮設住宅の方とふれあうちびっこツアー」を開催(於:六甲アイランド第二仮設住宅)。子ども23名・地域住民24名が参加。 <a href="#">写真1</a>
12月	「ちびっこ餅つき大会in六甲アイランド」を開催(於:六甲アイランド第二仮設住宅)。子ども21名・地域住民22名が参加。

## BrainHumanity History

1999  
2000

## NPO法人ブレンヒューマニティー誕生へ

指導会は、組織の変革期を迎えた。

1999年4月、指導会創設者の1人である能島裕介が新卒で勤めていた会社を退職し、別組織として「ブレンヒューマニティー」を立ち上げた。家庭教師派遣や補習塾等の収益事業を行って家賃を捻出し、事務所を指導会とシェアするという試みが始まったのである。その中から、不登校状態の子どもたちの学習支援を行う「HEP」が誕生する。こうした専門性の高い支援活動には、大学講師などの専門家のサポートも加わり、活動の幅がさらに広がりつつあった。

しかしそんな新しい動きとは裏腹に、同年に指導会の理事長を務めていた学生が、その激務から活動を継続することが困難な状況が発生した。社会的な期待が増す一方、学業やアルバイトなどの合間を縫って活動することが困難となり、指導会の存続が危ぶまれる状況となった。

長期に渡る議論の末、関学学習指導会は解散という結論に至り、その活動はブレンヒューマニティーへと引き継がれる。そして、ブレンヒューマニティーは1999年11月に特定非営利活動法人の設立認証申請を行い、学生主体としては全国初のNPO法人となった。

専従職員による安定的な組織基盤を得たブレンヒューマニティーは、2000年に初の事務局長を迎え入れ、不登校児童等を対象とした通所型支援としてフリースペースを開設するなど、指導会の活動を継続しながら新たな局面に入っていった。



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

日付

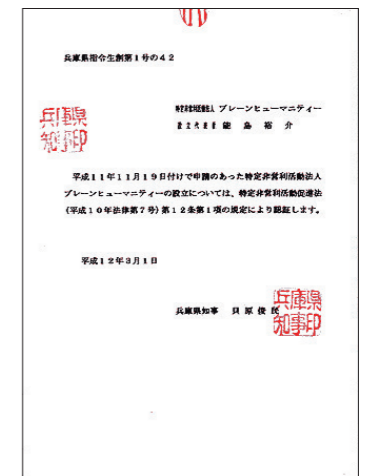
主な活動内容

## 1999年

- 5月22日 創立5周年記念式典を挙げる(於:西宮市立甲東ホール)。
- 6月15日 関学学習指導会役員らにより、新組織「BrainHumanity」を設立。兵庫県西宮市内に事務所を置き、補習教室の開設や、専従職員の雇用を開始。 [写真1・10](#)
- 9月1日 不登校の子ども達への訪問学習支援活動「Home Education Project(HEP)」を開始。 [写真8](#)
- 11月1日 特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人ブレンヒューマニティーの設立総会を開催。
- 11月7日 関学学習指導会の臨時総会を開催。BrainHumanityへの統合を決議。
- 11月19日 兵庫県知事に、特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人の設立を申請。

## 2000年

- 3月1日 兵庫県知事から、特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人の設立を認証される。日本初の学生主体NPO法人として登記完了。同日、理事長に能島裕介を選任。 [写真5](#)



- 3月 「被災児童支援事業部」「レクリエーション事業部」「HEP事業部」「家庭教師事業部」「補習事業部」からなる事業部制を制定。 [写真3・4・7・9](#)

- 4月 当会事務所にてフリースペースをオープン。不登校児童の全人的な教育、個性を育む場所として活動を展開。

- 6月 法人設立記念事業として「これからの『教育』を考えるシンポジウム」を開催。 [写真6](#)

- 8月 若者向け人間関係トレーニング(Tグループ)「Human Communication Laboratory」を開催。 [写真2](#)

## BrainHumanity History

2001  
2005

## 新規事業の開発と災害支援のボランティア活動

NPO法人化し、組織の基盤が徐々に整っていくと共に、新規事業が立て続けに産まれていく。

2001年には「ワークキャンプ」と呼ばれる、日常を離れて共同生活やホームステイをしながら現地でボランティア活動を行う海外プログラムがスタートした。貧困地域での住居建設を目的としたフィリピンでの開催を皮切りに、アメリカ、インド、マレーシアと次々に新規国での実施を成功させ、高校生に向けたプログラムとしては類を見ないものとなった。

2002年に学校の完全週休2日制が始まると、週末に時間を持て余す子どもたちに向けた「サタデープロジェクト」という日帰りイベントを開始し、申し込みが殺到した。こうした気軽に参加できるイベントから長期休みの宿泊キャンプにつなげていく流れができるなど、新しいプログラムは社会と当会のニーズに合致し、大きな展開を見せていくことになる。

事務局では、行政からの助成や委託事業の獲得にも力を入れ、兵庫県下でのよさこい祭りや大阪市内の不登校児のメンタルケアを行う通所施設の運営などを担い、運営資金の安定と共に信頼度を高めていった。2002年、さらなる先駆的な新規事業の開発を目指す「総合事業局」も開設し、日本国内の社会問題を取り扱う「釜ヶ崎ワークキャンプ」を行うなど、学生の柔軟な発想と覚悟が新たな価値を生み出していく。

2004年には、指導会時代から数えて創立10周年を迎えた。同年、福井豪雨による水害、新潟中越地震が発生している。各所にボランティアを派遣し支援活動を行ったことは、当会の原点を思い返す出来事となった。



写真4 県内の小・中学生を対象とした土曜体験活動(2002年・海上保安庁協力)

写真5 理事役員研修の様子(2001年)

日付

主な活動内容

## 2001年

- 1月 ボランティア・市民活動元気アップアワード「ボランティア国際年大賞」(ボランティアスクエア2001実行委員会主催)を受賞。
- 2月 西宮市長より「青少年ふれあいの賞」を受賞。
- 3月 被災児童を対象としたスノーボードプログラム「KOBE CHILL プログラム」(パトソン社協力)を実施。
- 4月 「NPOと行政の協働会議NPO部会事務局」の運営を開始(委託:兵庫県社会福祉協議会)。
- 5月 ミッションステートメントを制定。 [写真2・3](#)
- 8月 フィリピン共和国において、住居建設ワークキャンプ「高校生フィリピンワークキャンプ」を開催(協力:Eco-Habitat関西学院、助成:三菱銀行国際財団)。 [写真6](#)
- 8月 不登校児童らを対象とした「ボレボレキャンプ2001」を開催。
- 9月 「神戸垂水よさこいまつり」を企画・運営(主催:神戸垂水よさこいまつり振興会)。 [写真7](#)
- 11月 新規事業の展開及び柔軟な事業の見直しを促進する目的で「総合事業局」を新設。

## 2002年

- 4月 公立学校の完全週5日制導入
- 6月～10月 土曜レクリエーション事業「サタデープロジェクト」を開始。 [写真8](#)
- 7月 「ひょうごよさこい」を企画・運営(委託:兵庫県)。
- 8月 現地高校生との協働による住居建設のワークキャンプ「高校生USAワークキャンプ in Santa Fe」を開催。
- 11月 小学低学年児童を対象とした「はじめてのキャンプ」を実施。
- 12月 会計期間の変更を決議し、現行の会計期間となる。

## 2003年

- 1月17日 兵庫県「震災メモリアルウォーク」の企画・運営を補助。
- 1月30日～2月28日 高校生らによるホームレス支援ワークキャンプ「釜ヶ崎宿泊ワークキャンプ」を実施。
- 3月12日～22日 インドにおいて、高校生・大学生向けの住居建設キャンプ「震災復興ワークキャンプ in India」を実施(助成:兵庫県ボランティア市民活動元気アップアワード、地球市民財団、ソーニーマーケティング、兵庫県国際交流協会)。
- 5月10日～11日 小学低学年児童らを対象とした「はじめてのキャンプ～ちびっこだってできるんだぞ!～」を開催。
- 6月1日～ 西宮市内の公民館などで実施される宮水ジュニア講座に企画補助員を派遣(委託:兵庫県西宮市)。
- 7月30日～8月9日 高校生を対象に「タイワークキャンプ」を実施(共催:社団法人好善社、助成:アジア草の根国際交流協会)。
- 8月 財団法人井植記念会より「井植文化賞」を受賞。

## 2004年

- 3月26日～4月2日 マレーシア・サバ州において、高校生向け「マレーシア植林ワークキャンプ」を実施(協力:財団法人オイスカ)。
- 4月1日～ 不登校児童らのメンタルケアを目的とする「はっとスペース」運営事業を開始(委託:大阪市教育振興公社)。
- 7月23日 豪雨により被災した福井県鯖江市・今立町への救援活動を実施(協力:ひょうごボランティアプラザ)。
- 9月10日～17日 カンボジア・ポイベットにおいて、大学生を対象としたスタディーツアー「カンボジアスタディーツアー」を実施。
- 10月23日 新潟県中越地震(M6.8)発生。
- 10月28日～31日 新潟県中越地震で被災した小千谷市における支援活動を実施。 [写真1](#)
- 12月 当会創立10周年記念パーティーを開催。 [写真9](#)

## 2005年

- 3月 阪神・淡路大震災10年にあたり、兵庫県知事より被災地復興に向けた活動に対する感謝状を受領。
- 7月 中学生・高校生のための放課後における居場所「若者ゆうゆう広場」の提供活動を開始(助成:兵庫県青少年本部)。



## BrainHumanity History

2006  
2008

## あらゆる子どもたちに多くの機会と価値を提供

指導会の誕生やスクールカウンセラー制度が導入された1995年頃を境に、日本の経済成長は鈍化し、10年が経過していた。社会や学校などの多くのシステムが限界を迎えつつあり、それらから生み出される歪みが子どもたちに与える影響は、もはや看過できないものとなっていた。

当会は、子どもたちへの多種多様なイベントによって蓄積したノウハウを、不登校状態の子どもたちにも展開していく。家庭教師派遣や通所事業に留まらず、日帰り遠足や宿泊キャンプの提供、2008年には富士登山やマレーシア海外ワークキャンプを実施するといった活動の広がり、子どもたちに多くの機会と価値を提供する当会のミッションを体現するものとなった。またこの頃、学校に通っている子どもたちについても、かつて地域社会と子どもたちが緩やかにつながっていたような、家庭と学校以外の居場所の必要性が語られるようになっていた。そこで、2008年に大学生が運営する居場所というコンセプトを打ち出し、寄付を募って、翌2009年に「駄菓子屋本舗やなや」をオープンさせた。子どもたちとの日常的な接点として、居場所をつくり続けたのである。

この時期は、外部との協働を通じて社会課題に取り組む「協働事業局」が2006年に立ち上がるなど、行政からの委託事業が伸び、当会の予算規模が大きく膨らんでいった。子どもたちに向けたレクリエーション活動などを中心とした自主事業についても、新規の派生事業が次々と生まれていた。そうした当会の成長と共にボランティア希望者も飛躍的に増加したが、その人材育成や当会全体のマネジメントに課題を抱えるなど、ステージが上がっていく組織に見合った運営を模索する時期でもあった。



- 写真2 チャレンジング・デイズ2008(2008年)
- 写真3 フレッシュャーズ・キャンプ(2006年)
- 写真4 勉強会合宿(2008年)
- 写真5 釜が崎宿泊ワークキャンプ(2006年)
- 写真7 トップマネジメント研修(2006年)
- 写真8 ユースステーション長田のようす(2008年)

日付

主な活動内容

## 2006年

1月 「協働事業局」「国際関連事業部」「イベント事業部」を新設。  
「協働事業局」「国際関連事業部」は、「総合事業局」から委託事業などの協働事業と国際関連事業を移管したもの。「イベント事業部」は「レクリエーション事業部」から分離したもの。

7月 中学生・高校生の居場所「ユースステーション」の運営を開始(委託:神戸市)。

## 2007年

3月2日～11日 大学生を対象としたマレーシアにおけるスタディーツアーを実施。

7月16日 新潟県中越沖地震(M6.8)発生。

## 2008年

1月 「家庭教師事業部」と「補習事業部」を合併し、「学習支援事業部」を新設。

8月5日～10日 不登校の中学生・高校生を対象とした「ポレボレ富士登山」を実施。写真6

8月15日～22日 マレーシアにおいて、不登校の中学生・高校生を対象とした海外スタディーツアー「ポレボレマレーシア」を実施。写真1

8月18日～25日 淡路島から香住まで岩登りなどをしながら自転車で横断する「兵庫県自転車縦断プログラム」を実施(委託:厚生労働省)。

## BrainHumanity History

2009  
2011

## 新しい取り組み、東日本大震災

子どもを取り巻く環境は引き続き厳しく、当会の取り組みは、より広範囲に、より重い課題へと舵を切っていく。

そのひとつが「平均的な所得の半分に満たない世帯で暮らす子どもが増えている」というものであった。

2000年代の終わり、塾や習い事に通えず、教育的な格差や貧困の連鎖が生まれている現状が少しずつ知られるようになっていた。そこで2009年、寄付金を原資に学校外教育に使えるクーポンを発行する「CFC(Chance for Children)プロジェクト」を開始した。続く2010年には、大阪のNPO法人み・らいず(当時)との共同出資で、阪神間地域の障がいのある子どもとその家族に対する支援を行う「株式会社YEVIS」を立ち上げ、放課後等デイサービスを中心とする活動が始まった。

そうした取り組みを進めていた2011年3月、宮城県沖を震源地とする東日本大震災が発生した。この未曾有の災害に、当会は職員や学生を現地に派遣するなど、継続的な支援体制を模索した。最も大きな取り組みとして、CFCプロジェクトをスピノフする形で「一般社団法人Chance for Children」を設立し、当会OB3名が中心となって被災地の子どもたちの支援を進めていった。

また2011年は、高校での総合的な学習の時間の広がりを受けて、東京のNPO法人カタリバ(当時)の関西地域パートナーとして、高校にキャリア教育を目的とした出張授業を行う「関西カタリバ」事業をスタートした。奇しくも2011年は、阪神・淡路大震災が発生した1995年に生まれた子どもたちが、高校生になる年であった。



写真1 東日本大震災救援子ども基金(神戸三宮にて)(2011年)

写真2 こうべカタリ場 須磨翔風高校企画(2011年)

写真3 CFCクーポン贈呈式(2011年)

写真4 障がいを持つ児童生徒対象イベント「えびすクッキング」(2010年)

日付 主な活動内容

## 2009年

2月 子どもたちの居場所として、阪急夙川駅近くに「駄菓子屋本舗やなや」を開店。写真9

9月 児童養護施設善照学園に対する学習支援活動を開始。

11月 母子生活支援施設北さくら園に対する学習支援活動を開始。

11月 生活保護世帯の子ども達に学校外教育バウチャーを提供する「Chance for Children」プロジェクトを開始。

## 2010年

2月1日 NPO法人み・らいずとの共同出資により、障がいのある子どもを支援するための「株式会社YEVIS」を設立。

4月～ 兵庫県朝来市生野町奥銀谷を皮切りに小規模集落サポーターを派遣。

5月～ 障がい児者対象の外出を援助。年間イベント「みんなでおでかけ♪」を実施。ヘルパー養成講座を実施。

## 2011年

3月11日 東日本大震災(M9.0)発生。

3月18日～4月20日 被災者を支援するために、宮城県へ職員を派遣(助成:被災者とNPOをつないで支える合同プロジェクト)。

4月1日～ NPO法人カタリバとの協働で、関西圏の高校におけるキャリア教育を目的とした学校出張授業「関西カタリバ」を開始。

6月20日 被災した子ども達に学習機会を提供する目的で「一般社団法人Chance for Children」を設立。

11月3日～5日 大学生を対象に、震災復興支援「石巻復興ワークキャンプ2011」を実施(助成:日本財団)。写真5

写真6 CFC該当募金活動(2009年)

写真7 「サテライト旭」(旧「ほっとスペース旭」)運営(2010年)

写真8 黒川小規模集落ワークキャンプ(2009年)

## BrainHumanity History

2012  
2017

## 事業の拡がり、体制の見直し

子どもたちを取り巻く様々な課題を前に、活動はさらに拡大していった。東日本大震災から1年が経過し、当会は復興を目的としたワークキャンプや起業家へのフォローアップを始めとした継続的な支援活動を続けていた。またこの頃から、子どもの貧困問題が社会的な認知を得て、各自治体では課題解決に向けた予算化がなされるようになった。2012年、神戸市から生活保護世帯向けの学習支援事業を受託すると、その後兵庫県郡部、西宮市、明石市、そして奈良や大阪エリアまで、所得格差による学習機会を補う取り組みが広がっていく。2015年には、経済的な理由や家庭環境から欠食・孤食状態にある子どもたちを支援する「にしのみやこども食堂」をオープンし、大学生と子どもたちが同じ空間で食事を共にする活動も始めた。

一方、既存のレクリエーション事業では、キャンプ等を旅行業法上の旅行として取り扱うため、当会の100%子会社として2014年に「関西教育旅行株式会社」を設立し、自主事業キャンプのみならず、他団体によるキャンプにも、旅行業の適用をサポートするようになった。また、すべての週末にイベント実施を試みるなど、事業規模は拡大の一途を辿り、理事役員や事業部の学生、また職員へのマネジメント上の負荷がさらに大きくなっていく。そうした状況に加え、大学での授業出席日数が厳格化されたり、格差の拡がりから長時間のアルバイトを余儀なくされる学生が増加したりといった社会的な変化も進んでいった。2014年には指導会設立から20年が経過し、子どもだけでなく、サービスを提供する大学生の状況や考え方も大きく変容している中で、当会の体制を見直す時期に差し掛かっていた。



写真1 20周年を機に改装した新ボランティアスペース(2014年)

写真5 大学生チューター養成研修(2012年)

写真6 関西教育旅行株式会社初主催のキャンプ(2014年)

日付

主な活動内容

## 2012年

8月26日~27日 障がい児を対象とした野外キャンプ「サマーキャンプin明石」を開催。

## 2013年

7月1日~ 奈良市内、大阪市内の小学校で、児童を対象とした学習支援を開始(委託:奈良市教育委員会、大阪市)。

11月24日~3月16日 就学前児童を対象とした日帰り企画「サタプロキッズ」を実施。

## 2014年

1月6日 当会の出資で、教育と旅行を融合した各種事業を展開する「関西教育旅行株式会社」を設立。

2月23日 当会創立20周年記念パーティーを開催(於:宝塚ホテル)。写真3

## 2015年

5月1日~ 兵庫県西宮市内の公立中学校生徒会役員らを対象とした、リーダーシップ育成事業を実施(委託:西宮市教育委員会)。

9月1日~ 大阪府松原市内の多子世帯の小学生・中学生を対象に、学校外バウチャーを提供(委託:松原市教育委員会)。

12月28日 小学生・中学生・高校生を対象とした「にしのみやこども食堂」事業を開始。写真2

## 2016年

4月1日 「学習支援事業部」と「不登校関連事業部」を合併し、「教育支援事業部」を新設。

4月14日 熊本地震(M6.5)発生。  
4月16日 熊本地震(M7.3)発生。

6月 NPO法人生涯学習サポート兵庫との共同出資により、一般社団法人プラス・ネイチャーを設立。

9月7日~10日 大学生を対象に、熊本地震の被災地での復興ワークキャンプを開催(助成:ひょうごボランティアプラザ)。写真4

## 2017年

4月 一般社団法人プラス・ネイチャーが、伊丹市立野外活動センター(兵庫県三田市)を購入取得。

11月 一般財団法人地域政策研究会より「貝原俊民美しい兵庫づくり賞」を受賞

## BrainHumanity History

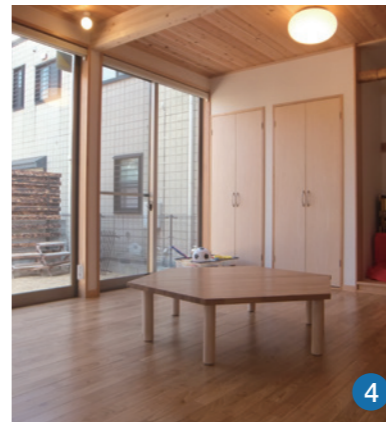
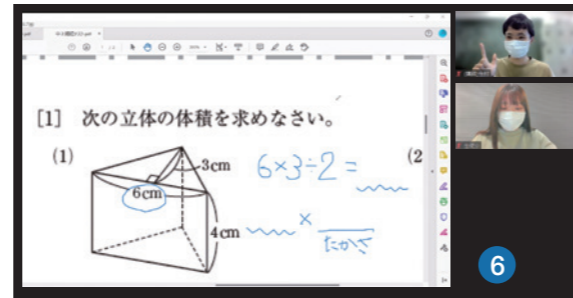
2018  
2024

## 理事長の交代による新体制、コロナ禍へ

2018年は、組織としての大きな動きを迎えることとなった。理事長の交代である。一般的にNPOは、創設メンバーが持つ社会課題解決へのエネルギーが大きな推進力となるが、その属人性ゆえに引き継ぎが困難になるケースが多いと言われる。しかし当会の根幹をなす「学生主体」による学生と職員の年齢差の広がり、また多岐に渡る事業の社会的影響力などを鑑み、当時20代の当会OB松本学へと理事長を交代することとなった。

新体制となった当会は、学生ボランティアとの関わり方や規程を大幅に見直しつつ、さらなる行政案件の獲得に成功した。大学入試センター試験の廃止や学習指導要領の改訂など、中高生を取り巻く環境が激変している中、2019年には若者の活動拠点となる「尼崎市立ユース交流センター」の運営が始まり、全国的な注目を集めた。

しかし2020年には、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染爆発に見舞われた。事務所にすし詰めとなって、子どもたちに様々な機会を提供するために日々議論し、企画を練り、備品の準備を行う学生たちの姿が消えた。そうした中でも、学生から学生へ脈々と引き継がれてきた当会のあり方や向き合い方は、コロナ禍に翻弄され、形を変えながらも、途切れることはなかった。感染症対策をしながら、子どもたちにどうやって機会を提供するのか。そうした難題を乗り越えながら活動を続け、再び多くの子どもたちに機会を提供できる日々が戻ってきた2024年、当会は設立30周年を迎えたのであった。



日付

主な活動内容

## 2018年

- 1月 理事長に松本学を選任。
- 3月～ 兵庫県尼崎市の一部地域の小学生を対象とした居場所「b&g園田」を運営(助成:公益財団法人日本財団)。写真3・4
- 4月 一般社団法人プラス・ネイチャーが、取得した伊丹市立野外活動センター跡地に「神戸三田アウトドアビレッジTEMIL」を開業。写真2
- 5月 神戸新聞社より「神戸新聞社会賞」を受賞

## 2019年

- 4月 共同事業体「尼崎ユースコンソーシアム」にて、兵庫県尼崎市の青少年施設「尼崎市立ユース交流センター」の管理運営を開始。写真5

## 2020年

- 2月 WHO、感染拡大する新型コロナウイルスを「COVID-19」と名付ける。
- 3月 兵庫県西宮市の休校措置に伴い、ひとり親・共働き家庭の小学生・中学生を対象とした居場所「サタプロステーション」を運営。
- 4月～ 関西圏内の高校において、高校生を対象とした課題探究授業「課題探究プログラム Seeker」を実施。写真8
- 9月 高校生・大学生を対象とした、ミャンマーでのスタディーツアーをオンライン形式で実施。
- 9月 困窮世帯やコロナ禍で困っている家庭へのオンライン学習支援を実施(助成:三井住友銀行)。写真6

## 2021年

- 1月～2月 高校生・大学生を対象とした、海外の方々とオンライン異文化交流事業「うちde国際交流」を開催。
- 8月～ 家庭訪問を通じた小学生を対象とした見守り事業を開始(委託:尼崎市)。
- 11月～ NPO法人カタリバと連携して中学生・高校生を対象に、学校校則を見直す企画「ルールメイキングプロジェクト」を実施。

## 2022年

- 2月 共同事業体「尼崎ユースコンソーシアム」として、ヤングケアラーを対象に当事者同士での交流会を開催(委託:尼崎市)。

## 2023年

- 3月 「マレーシアワークキャンプ2023春」を開催。写真7  
以後、海外事業を段階的に再開。写真1

## 2024年

- 1月1日 能登半島地震(M7.6)発生。
- 5月1日 創立30周年を迎える。

## 追悼 長尾 文雄氏

前身団体時代から当会に多大なご協力を賜りました  
長尾文雄さん(当会顧問)が  
2023年12月17日、天に召されました。

本誌の編纂にあたり  
当会とともに歩んでくださいました長尾さんからの  
お言葉を頂戴したいと考えていた中での突然の訃報でした。

本誌を長尾さんに捧げますとともに  
魂の平安をお祈り申し上げます。



長尾 文雄氏

1940年11月7日生まれ。  
関西学院中学部、高等部を経て、関西学院大学文学部卒業。  
その後、学校法人関西学院の職員を勤めながら  
立教大学キリスト教教育研究所(JICE)で  
「ラボラトリー・トレーニング」(Tグループ)を学ぶ。  
1982年、聖マーガレット生涯研究所(SMILE)設立、主任研究員に就任。  
大阪女学院短期大学非常勤講師などを兼務。  
公益社団法人好善社理事、  
社会福祉法人いのちの電話の電話訓練委員・理事・事務局長、  
NPO法人ブレインヒューマニティーの理事なども務める。  
2023年12月17日昇天。享年83歳。

---

---

# 寄稿

それぞれの時代をふり返って

Contribution

---

---

## 1994

はまむら なおゆき

## 濱村 直之

関学学習指導会初代理事長  
1997年卒

## ちいさなはじまり

1994年。如何せん30年前のことである。僅かな記録と記憶を著すに留めざるをえない。

高校時代からの付き合いではあったが、特段仲が深かった訳でもない友人らと、大学に入学してまもない大教室の後方で、たまたま一緒になった。何の科目だったか定かでないが、入学早々にも拘わらず講義をほとんど傾聴することなく、友人らと雑談をしている際に、能島裕介が口火を切った言葉を鮮明に憶えている。大手家庭教師業者は、アルバイトの学生とご家庭の間に立って、マージンを搾取している。業者を仲介させずに学生とご家庭を直接繋げば、学生の時給を上げられるし、ご家庭には安く提供できる。そんな家庭教師の斡旋の団体を作らないか、というものだった。

大学生になって、まさにその大手業者に登録して家庭教師のアルバイトを始めていた私。彼の着眼に、なるほど尤もな話だと相槌を打っているうちに、「組合関学学習指導会」発起人の一人として名を連ねることとなった。同年5月1日、能島が作ってきた「組合契約書」に署名捺印をした。

伊東真一。能島裕介。森川隆博。そして私。これがそのメンバーである。

大手業者は、アルバイト学生とご家庭との双方に直接契約に代えることを禁じる契約を交わさせていたため、私は、大手業者の仲介のまま家庭教師を続けていたのだが、高校時代からの他の友人らの中には、この「関学学習指導会」による紹介を受け、家庭教師を始める者もいた。

こうして始まった当会の運営だが、所詮は学生のサークルであり、私達が学生のうちに終焉を迎えるものとばかり思っていた。私に限らず、メンバー全員が、おそらくそうであったろうと思う。

当会の原点は、本当に「ちいさなはじまり」であった。

翌年1月に、淡路島を震源とする都市直下型巨大地震「阪神・淡路大震災」が起き、私達の住み慣れた阪神間の街並が壊滅することなど、地震学者も市民も誰一人として、予想だにできなかった。発災後、私達を取り巻く環境は劇的に変容し、当会の活動は枝葉を拡げていった。

賛同する学生が集い、活動への協力者が増え、当会の活動は拡大の一途を辿ったのであるが、30年を経て、当会か

ら追想の寄稿を求められることなど、大教室の雑談当時の私には知る由もなかった。

当会の活動趣旨にご賛同賜り、これまでご協力下さった多大なる皆様方に対し、発起人の一人として、この機会を借りて、衷心より御礼を申し上げたい。

## 1995

おおふじ やすお

## 大藤 泰生

関学学習指導会会員・家庭教師  
1997年卒あの時、  
どう伝えれば良かったのか？

「私はその理由はおかしいと思うのだけど、仕方ないですね」

ボランティアに行くのだから、快く送り出してくれると思っていた。そうではなかった。今にして思えば当然なのだが、当時はそこまで考えが至っていなかった。

1994年4月、関西学院大学に入学した私は、ほどなく友人たちが始めた「関学学習指導会」の紹介により、西宮市のAさん宅に家庭教師のアルバイトに通っていた。週に1回1時間、割り算が苦手というAさんの娘に算数を教え、Aさんから現金手渡しで謝礼を受け取る日々が続いた。関学学習指導会は仲介料を取らない方針だったため、家庭教師は派遣先から謝礼と交通費を直接受け取れた。初めての家庭教師ではあったが、割り算が苦手な原因(九九の七の段を覚えていない)を突き止めるなどして、娘さんの学力向上へそれなりに貢献できていたように思う。

年が明けて1995年1月17日、阪神・淡路大震災が発生。私は自宅のあった芦屋市内で被災した。幸い、家族も自宅も無事であった。避難生活に苦しむ被災者が残る一方で、自宅付近はライフラインの復旧も比較的順調に進み、私自身は徐々に日常生活を取り戻していった。関学学習指導会は、被災児童への家庭教師無料派遣という形でのボランティア活動を始めた。私は派遣される家庭教師の立場でこれに参加した。

Aさん宅も被害の少ない地域だったため、そちらへの家庭教師も再開する運びとなった。しかし、私は被災児童へのボランティア活動を優先するため、Aさん宅の家庭教師は再開後すぐに辞めさせてもらうことにした。Aさん宅は有償の家庭教師なのだから、代わりに大学生がすぐ見つか

るはず。だから、私が辞めても大丈夫なはず。そう考えて、Aさんに辞意を伝えたところ、冒頭の言葉に繋がったのである。

あの時、どう伝えれば良かったのか。Aさんにしてみれば、我が子のために決して安くはない謝礼を支払い続けていた家庭教師である。事情がどうあれ、他の児童のために、しかも無償で教えに行くために辞めるというのは納得できなくて当然である。震災による被害の大小に関わらず、勉強に悩んでいる子は悩んでいるのだ。答えの出ないまま忘れていた約30年前の記憶を、ここに書き残す。

## 1996

のじま ゆうすけ

## 能島 裕介

関学学習指導会第2代理事長  
当会初代理事長  
1997年卒大きく拡大した被災した  
子どもへの支援事業

1995年1月17日の阪神・淡路大震災以降、関学学習指導会では被災した子どもたちへの学習支援や野外活動の支援を行ってきた。震災から1年が経過した1996年頃には関学学習指導会の認知度も高まり、継続的にイベントに参加する子どもたちも増えてきていた。95年以降、春休み、夏休みには2泊3日程度のキャンプを行ってきていたが、96年も同様にキャンプを実施した。春休みのキャンプには60名以上、夏休みのキャンプには80名以上の子どもたちが集まり、スタッフもあわせると100名を超える大規模なキャンプとなった(参加者80名以上のキャンプというのは当会の歴史のなかでも最大級といってもいいだろう)。

また、それまでのキャンプは関西学院千刈キャンプで行ってきたが、96年の夏には子どもを対象にした教育キャンプを行ってきた「ブルービーンズシヨア」という団体と協働で小豆島での海洋冒険キャンプを実施するなど、キャンプの種類も増え、大きく事業が拡大していった。

その頃、運営を行う大学生、高校生ボランティアの人数が増え、組織運営について試行錯誤がなされはじめてきた。関学学習指導会は1994年の発足以来、創設者である伊東真一、能島裕介、濱村直之、森川隆博の4名が常任理事を務め、4人による合議で運営を行ってきたが、運営メンバーも増加してきたことから広く理事を募るため、規約を改正し、メンバーによる互選で理事を選任し、理事の互選によって理事長を決定する仕組みに改めることとなった。そして、私が初代理事長の濱村直之の後任として、第2代理事長に選任された。

震災の混乱のなかで、子どもたちや保護者からの直接的

なニーズによって、衝動的に動き出した活動も規模が拡大し、徐々にではあるが組織を運営するということに意識が向き始めた。増え続ける子どもたちのニーズに対して、しっかりと応えていく責任。どんどんと拡大していくボランティアメンバーのマネジメント。それまでは子どもたちと一緒に遊ぶという非常にわかりやすく、直接的な活動がほとんどだった指導会に、間接的な管理業務が増え始めていた。



## 1997

もりやま りゅういち

## 森山 隆一

関学学習指導会第3代理事長  
2000年卒

## 創立者らから引き継いで

1997年は今から27年前。記憶を遡るにも限界がある中で、能島さんの「偶然の記録」(注1)と自分で書いた「偶然の輝き」(注2)に助けられました。当時のことを書き残してくれた能島さんと、それをネット上にアップしてくれた大藤さんに感謝です。

私は、1996年の冬に能島さんと関学高等部の職員室で出会いました。生徒会顧問の枝川先生が、「3年先輩の生徒会長を紹介しよう」ということで、引き合わせて下さいました。能島さんは、春キャンプの準備で高等部に足を運ばれていました。この時に、お茶でもどうかと誘ってくださったことにも感謝であり、そこで是非!とついていった自分を本当に褒めたいです。「人との出会い」が人生を決めるということをつくづく感じます。

そこから関学学習指導会の活動にドはまりし、1997年9月、大学1年生の時に能島さんから理事長のバトンを受け継ぎました。西宮北口の居酒屋「安芸」さんと、能島さんの想いと理事長としてのやりがいと苦勞をお聞きしたうえで、なんのためらいもなく「やりたい!」とお伝えしたことを覚えています。

それまで一参加者として千刈のキャンプやスキーツアー、デイキャンプに参加していたものの、総責任者をやったことがなかったので、実力を認められてというよりも、意気込み

を能島さんに評価していただいたのだと思います。では、なぜそこまで意気込みがあったのか？ それは、会のコンセプトが素晴らしかったからです。

① 何かをやりたいと思った人が手を挙げて、そこに人が集まる。やりたい人、この指と一まれ!というスタイル。何でもできる!という空気感があって、この場にいただけで「わくわくする」という実感がありました。

② そして、学生団体で経験がないがゆえに、準備に一切の妥協をせず、あらゆる可能性を想定・想像して、徹底的に目の前のことに取り組むということ。能島さんの「喜びはそのための努力に比例する」という言葉に、心の底から魅了されました。

能島さんが就職するまでの間に、少しでも能島さんから学び、スキルアップをしなければならぬということで、スキーツアー、スケートオリエンテーリング、水族園大冒険、スプリングキャンプと多くの企画を実施しました。その引き継ぎを通じて、能島さんからは「自分の判断、選択には徹底してその責任を負え。責任とは反省や後悔のことではなく、最後まで自分の作り出した状況から逃げないこと」を体験・経験を通じて学びました。この「責任」が会の「自由」を作り出し、その「自由」が活動の発展に繋がりました。

その姿は今でもまったく色褪せない、企業経営やマネジメントの最先端だったと言えます。それを大学4年生で能島さんは熱く語っていたので、おそらく人生3周目ぐらいではないかと真剣に思います。

関係する皆さん全員が自由と責任を理解し、ミッションのもとに集まることで、ぶれることなく、途切れることなく、歩んで来られたのだと思います。

(注1)  
<https://www.brainhumanity.or.jp/history/guuzen/guu-zen.html>

(注2)  
<http://www.brainhumanity.or.jp/tsunagi/guuzen/001.html>

## 1998

あんざい ようた  
**安西 陽太**

ちびっこ支援基金第2代基金責任者  
 2000年卒

### ちびっこ支援基金の創設

1995年の阪神・淡路大震災以降、関学学習指導会の活動はどんどんと大規模なものになっていた。キャンプや日帰りのイベントなどにも多くの子どもたちが集まり、ボランティアの数も100人近くになっていた。

ただ、組織が大きくなるにつれ、管理コストも徐々に増えていった。たとえば、関学学習指導会の設立当初は事務所

もなく、創設メンバーの1人のワンルームマンションが事務所代わりになっていたし、そのワンルームマンションに置かれた固定電話が指導会の電話窓口にもなっていた。しかし、活動が大きくなるにともない、そのような体制では参加者からの問い合わせなどに対応することも困難になり、1997年頃から秘書代行の会社と契約して、電話受付などを行ってもらうこととなった。

これまでキャンプなどの参加費は被災した家庭の子どもたちが参加しやすいようにほぼ原価に近い設定にしていたため、そこからこうした管理費を捻出することも難しく、活動を継続していくためには、安定的な収入を確保することが必要となっていた。そこで考えたのが「ちびっこ支援基金」というファンドを創設し、多くの方々から寄付をいただき、管理費なども捻出しながら、子どもたちの参加費なども低廉な状態を維持しようというアイデアだった。

基金の初代責任者には関学学習指導会の理事長であった森山隆一が就任したが、その後、私が後任の基金責任者を務めることになった。この基金の創設に際しては、阪神大震災地元NGO救援連絡会議代表の草地賢一さん、関西学院院長の宮田満雄先生、神戸YMCA総主事の山口徹さん、聖マーガレット生涯教育研究所の長尾文雄さんなど錚々たるメンバーが呼び掛け人に名を連ねてくださった。

この基金は震災の年に生まれた子どもが義務教育を終了する2010年まで継続することを目標として掲げていたが、1999年に関学学習指導会がNPO法人ブレインヒューマニティーに統合されたことにともない、基金もブレインヒューマニティー内に移管されることとなった。基金の設立趣旨書にはこう書かれている。

『「教えるとは希望とともに語ること」私たちはこの言葉を胸に、2010年まで子供達の成長と同じ速さで、同じ視点から、子供達と共に歩んでいきたいと思っています』

その思いは2010年を越え、2024年の今日まで受け継がれている。

## 1999

いしだ だいすけ  
**石田 太介**

元・当会HEP事業部副代表  
 2000年卒

### 不登校支援・HEP

1999年は、それまでキャンプなどレクリエーション活動による被災児童支援が主たる活動だった関学学習指導会に活動の枝葉が生まれた印象的な年だった。

運営費用確保の目的にもなっていた家庭教師派遣の事業で、指導会のレクメンバーである橋本崇が担当した児童が不登校状態であった。児童が勉強に向かうにはどうしたらいいのか、指導会メンバーや長尾先生と話し合う中で、

不登校児に関わる講師の組織的支援によって学習支援を行う「Home Education Project(HEP)」が誕生した。

当時は学校に登校する状態が当たり前で不登校は心の病気であるという意見が強く、不登校児に関わるのは専門家でない児童にとって危険だ、学生が関わって責任が取れるのか、と現在では考えられないほどの「腫物感」が社会に蔓延していた時代だった。

HEPは、勉強をフックに児童と関わり、不登校状態であるために人との関わりが少なくなった児童の“1つの窓”となることを目的とした。講師の最も大切なスキルは、意見を子どもに押し付けるのではなく、児童の声に耳を傾けることだった。

また、学生だけでは関わりに悩むこともあることから、ワーキングチームによる研修と、シェアリングという名の継続研修兼共有の場が毎月設けられることになった。

公募にて集まったHEPの講師希望メンバーは、関学のキャンパスにてワーキングチームの研修を受講したが、その内容は不登校についての知識よりも、対人関係トレーニングを重視したものだった。話を聴くために耳と心を傾ける、いわゆる傾聴トレーニングが重視された。

研修の公募が決まると新聞にHEPのことが取り上げられ、数十件の問い合わせが指導会に寄せられた。多くはHEP講師派遣とは結びつかなかったが、最初の研修を受けた1期生からは5件程度の派遣に至った。

講師派遣が始まると指導会の教室で車座になりシェアリングを行ったが、「勉強をしたくない子どもに家庭教師としてどう接したらいいのか」「不登校児と聞きネガティブなイメージを勝手に描いていたが、実際に接してみると普通の子どもと変わらないことに驚いた」「子どもと心の距離を近くするためにゲームばかりしているが、勉強しなくて良いだろうか?」など。シェアリングで語られる内容は当初専門家が危惧していた「腫物感」とは全く異なる、「どこにでもいる子ども」の話が大半を占めているのが印象的だった。

2年目となる2000年の研修では講師希望の研修受講者は40名を越え、ワーキングチームも増員され西宮市立甲山自然の家で宿泊研修が行われた。より深い対人関係トレーニングが行われ、自身の過去の経験と向き合うことで泣き出す学生もいた。「人を受け入れることは自分を受け入れることだと思った」と言っていた講師の声が思い出されるが、学生時代にこのような経験が出来たことは、今思っても本当に驚きである。

大学、地域ともに幅広い学生が集まったことによってHEPの派遣エリアも大きく拡大した。不登校事業が大きく広がっていった時期だった。



## 2000

こんどう えみこ  
**近藤 絵美子**

当会初代事務局長

### ブレインヒューマニティー黎明期：職員の視点から

NPO法人として認証を受けたばかりのブレインヒューマニティーに新卒職員として勤めだしたのは2000年春。当時私は1997年に起きた神戸連続児童殺傷事件、そこから発展した少年法改正問題に心を囚われ、在籍していた法学部から教育学部へ転身を図ろうと模索しているただ中でした。その中で出会った不登校児童支援や海外ワークキャンプなどの青少年育成事業に取り組むこの団体には、既存の教育の沼に風穴を開けるような明るい期待感があり、私の目にはことさら新鮮に映りました。

入職してまず驚いたのは学生による自治・運営能力の高さ。期待を超える瞬発力と、事業遂行のスピード感。振り返れば自分自身もさして変わらない年齢ではありましたが、ずいぶん頼もしい後輩に見えました。しかし実際、職員としての私に期待された業務は教育現場とはかけ離れ、事業を円滑に進めるための資金調達。官民の助成金情報をかき集め、慣れないパソコンで書類を作成し(当時は一太郎が主流)、見よう見まねでプレゼンを行い、それなりの金額を集めることに集中しました。そして資金活用の透明性の重要さも学びました。

もう一つの大仕事が、兵庫県社会福祉協議会の委託事業であった「NPOと行政の協働会議」事務局業務。当時県内にはまだ阪神・淡路大震災の気配が色濃く残っており、復興に関連するあらゆるNPO、そして県庁の関係部署と毎月のように会議を重ねました。玉石混濁な各種NPOやその関係性を俯瞰的に見ることができ、さまざまな官民の実践を知る好機となっただけでなく、組織として公的業務の実績を積むことで認知向上の一助にもなったと自負しています。またどの会議においても最若手だった能島理事長(当時)と私は、諸先輩方からたいそう可愛がっていただいたのも懐かしい思い出です。

2002年の末に退職し、その後、英語科教員として10年ほど教壇に立ちました。

ブレインヒューマニティーそのものが教育の生きるプラットフォームであったことに気づくのは、ずいぶん後のことです。そして柔軟に粘り強く、このプラットフォームが脈々と引き継がれていることを心より嬉しく思います。

「人生に一度、ブレインヒューマニティー」と言った学生がいました。これからも多くの学生がこのプラットフォームに出会い、通過し、力強く世界に旅立っていくことを願います。

## 2000

かわなか だいすけ

## 川中 大輔

元・関学学習指導会監事、元・当会副理事長  
2002年卒関学学習指導会から  
BrainHumanityへ

(1999年-2000年)ー参加性と事業性の葛藤ー

1999年11月7日、関学学習指導会(以下、指導会)は解散し、BrainHumanity(以下、旧BH)と合併した。あわせて指導会に設置されていた「ちびっこ支援基金」も解消し、その全額を旧BHに寄付した。旧BHは能島裕氏が住友銀行を退職して1999年4月に創業した補習塾であり、橋本崇氏や森山隆一氏ら指導会の役員の一部も加わって運営されていた。1999年度当初は指導会と旧BHは事務所を共有しながら、別々の団体として並存することが考えられており、解散/合併は想定されていなかった。それだけに解散に至る過程では困惑と混乱が広がることとなった。そのピークは1999年8月11日に9時00分から23時54分まで行われた会議(以下、8.11会議)であった(その詳細は逐語録『解散ーその意味とはー』を参照されたい)。

それでは、なぜ指導会は解散することとなったのであろうか。1999年当時、指導会の理事会や総会では二つの路線を巡る相違が生じていたと筆者は捉えている。一つには、事業規模拡大と事業領域拡張が進む中、そのニーズの高まりに応じていくために、事業性/専門性を強める方向に向かう路線である。レクリエーション事業を被災児童支援事業から独立させて事業対象を広げたのもニーズの変化に応じる動きの一つであった。また、不登校関連事業の嚆矢となるHEP[Home Education Project]や、被災児童支援事業の新機軸として神戸レインボーハウスとの協働のもと震災遺児らの学習支援に取り組む「learnin'99」といった新規事業が開発されたのも1999年のことである。この拡充路線は自ずと求められる社会的責任を高めることになるため、学生が「やりたい時に・やりたいことを・やりたいだけする」といった姿勢/態度を退けていくこととなる。加えて、マネジメントの高度化も起こるため、マネジメントを活動の中心に据える層を厚くする必要も出てくる。ところが、その水準の高さ故に組織運営に参加するハードルは上がり、担い手不足の問題に直面することとなる。

そこで、学生の自由な参加を重視して、事業と組織に関与するハードルを低くし、学生団体(サークル)として担える力量の範囲内に活動を縮小する意見がもう一つの路線として出てきたのであった。当時のメンバーの間では、指導会のために時間や労力が大幅に割かれて学業や課外活動・アルバイト等に支障を来すのではないかと懸念が共有されていた。そのことは指導会理事長であった森山氏がパーンアウトして辞意を表明した後、8.11会議でその役職/役割を継ぐことに皆が躊躇したことにも現れてい

る。組織運営の高度化についても、例えば規約/規定が法律用語で作成されるようになって理解が広がらなくなっていることが問題視されていたり、会計資料で複式簿記を導入すれば、会計に関する基礎知識がなければ作成も読解もできなくなることが問題として提起されていたりした。

学生の意思に基づく参加性を保障することと、ニーズに基づく事業性/専門性を強化することとの葛藤を調停する方策が見つからなかったことが、解散という結論に至ったと筆者は総括している。そのため、解散/合併の際、指導会に所属していたボランティアはBHに引き継がれなかった。拡充路線に同意する者だけが、1999年11月19日に特定非営利活動法人の設立認証申請を行ったBrainHumanity(現BH)に登録し直すこととなったのである。

法人格取得後、特に2000年~2002年にかけては、事業型NPOとして成長していくための組織基盤の整備/強化が進むこととなった。例えば、中長期ビジョン委員会によってミッション・ステートメントや初めての中長期ビジョンの策定がなされたり、ボランティア委員会(後のボランティア・マネジメント委員会)でボランティア・マネジメントの仕組みが提案されたり、各種研修の体系化がなされていった。理事選考委員会が初めて設置され、担当理事制が拡大されたのもこの期間である。2001年には、日米コミュニティ・エクステンジ(JUCEE)によるNPOパスファインダープログラム(NPOP)でCenter for Service Learning Opportunities in Educationサンタフェ事務所のディレクターであったスーザン・ストレート(Susan Straight)氏がBHで半年間活動することとなった。この時にサービラーニングの理論がBHに持ち込まれたことにより、活動する学生の学びと成長の質を高めていくための試行錯誤が促されたりもした。

折しも1998年に特定非営利活動促進法(NPO法)施行を受けて、全国各地でNPO法人が次々に設立される中、NPOという社会組織やNPOのマネジメントへの関心が高まっていた頃である。欧米のNPO/NGOからの招聘も含め、NPOマネジメントに関するセミナーが関西でもしばしば催され、専門書や情報誌の公刊も相次いでいた。こうした時代背景もBHの組織基盤整備を後押ししたと言えよう。そのため、いくつかの事業での不安定さは課題として残りつつも、組織としての安定感は急速に増していくこととなったのである。



## 2000

くらたに あきのぶ

## 倉谷 明伸

当会フリースペース事業部元代表

## フリースペース開設

振り返ると1999年のこと。それまでの会社員を辞め、子ども関係で魅力的な仕事を探していた自分は、関西圏のオルタナティブスクール、フリースクール、ホームスクーリングなどを回っていました。

その中で「西宮に新しい学校を作ろうという動きがあるらしい」という話を聞き、ブレンヒューマニティーを初めて訪れることになったのです。

実際にはそんな計画は無く、代表の能島さんがインタビューか何かで、将来的なアイデアの1つとしてちらっと出しただけのものが、尾ひれが付いて全くの誤報として流れてきたものでした。

しかし、ちょうどその頃は当会が西宮北口に事務所を構えたところで、自由になるスペースがあったことから、せっかくだから、その話をやってみよう、ということになり、とんとん拍子で驚きのスタートを切ることになります。

フリースペース開設にあたり、最初に行ったのは「今の時代に新しい学校を作るなら、どういうものが良いのか?」を見極めることでした。

ネットや新聞記事などで、新しい学校の設立準備会を募り、子どもを持つ保護者、大学教授や教育に興味を持つ大学生など、様々な立場の方に集まっていただきました。

設立準備会では、何度も何度も、理想の新しい学校についての話し合いが持たれたのですが、みんなが納得できるようなベストな方向性は見いだせず、完全に煮詰まってしまう。

その時、1人の方が言ったのが、「何だか、大人だけで机上の空論で、理想の学校の話をしてしまっている気がする」という言葉でした。

本来、学びの主役であるはずの子ども達を中心に置かず、大人だけでの理想の話し合いになってしまっていたのです。

このことから、新しい学校のスタンスは、「子ども達が自分で学びを作っていく」「学校はそれを最大限にサポートしていく」というものに決まりました。

学校と大人側が理想を作ってしまうようなことはせず、学びの主役である子ども達が自ら理想の学びの場を作っていくという、新しい学校が誕生することとなります。

## 2001

きど たけひろ

## 城戸 武洋

2001年国際ワークキャンプ総責任者  
2001年卒

## 国際事業のはじまり

当会における国際事業は高校生向けのワークキャンプとして始まった。日本の若い人々に途上国の現状を知る機会を作りたいと思い、2000年の秋に有志と準備を開始した。国際的NGOであるHabitat for Humanityと連携し、貧困層の方々の住居建設に高校生と共に参加するという事業である。行先はフィリピン、ネグロス島にあるドゥマゲッティ市。事前の下見は出来ず、ノウハウも無い。参加者が集まるかも分からない。不安も抱きながら、暗中模索の中、信念のみを頼りに準備を進めた。

参加者の負担を下げるため、最初に助成金申請に取り組んだ。幸いにも三菱銀行国際財団から約100万円、また、2001年1月にはハーバランドで開催されたボランティア・スクエア2001において大賞(100万円)を受賞。約200万円の助成金を前にし、「もう、引き返せない」。そう自分達に言い聞かせた。

2001年4月には新聞を通じて参加者を募集。高校1年生から3年生まで、約20名の参加者が確定した。優等生から破天荒タイプまで、想像以上に幅広い特徴の高校生が集まった。嬉しい反面、引率・管理は大変な予感。6月から複数回の合宿を行い参加者の交流を深めた。住居の建築費のための募金活動も行い、共に汗を流すことで一体感を醸成し、渡航前には1つのチームになった。

こうして8月中旬、20名の高校生と引率8名のスタッフは現地に向かった。マニラを経由し、一行はサイトのあるドゥマゲッティ市に辿り着く。2名ずつホームステイの家に分かれ、日中は2班で現地の大工の指示の下、住居建設を手伝った。夕方や休日には街中やビーチなどで時間を過ごし、現地の方々・自然との交流を楽しんだ。フィリピンと日本の違いを見つつ、心と心が触れ合う経験もしたのだろう、最後には涙を流す高校生もいた(注:綺麗なストーリーだけではなく、高校生ならではの種々のトラブルも勿論あり、能島さんと激論を交わす場面もあったがここでは割愛)。

5日間のサイトでの建設を終え、船でセブに移動し、1泊して帰国の途につく。高校生は感動に浸っていたかと思うが、引率側としては初の国際事業で大きなトラブルが無く、文字通り安堵の帰国である。後日、アンケートを取り、また、別途報告会を開催し、保護者などにワークキャンプの様子を共有した。一連の南国での「熱い」夏が終わり、高校生は日常へと戻っていったが、非日常的な夏を通じ成長し、忘れがたい思い出になったのではないだろうか。

その後、国際事業は今日まで継続していると聞いている。引率者・参加者双方にとって大きく視野を広げてくれるこの事業のインパクトは大きく、継続的に機会を提供できている



この意義は高いのではないだろうか。創設時は何よりも幸運に恵まれた。当時の事務局長、引率スタッフ、旅行代理店の皆さま、そして理解を示してくださった参加者の保護者の方々には感謝の念しかない。

## 2001

しんかい まさお  
**新開 政雄**

第2回神戸垂水よさこいまつり実行委員長  
 元・当会財務担当理事  
 2001年卒

### よさこい

2001年9月22日(土)、23日(日)に、神戸市垂水区にて「第2回神戸垂水よさこいまつり」を開催した。よさこいまつりは高知県発祥で、戦後市民が元気に復興していこうという想いのもと始まった「踊りによるおまつり」である。

私達の「神戸垂水」は、第1回は垂水区の行政(垂水区役所)主導で行ったが、当時責任者の山崎課長が、「やはりよさこいは、市民の力によって創りあげられる方が必ず魅力的なまつりになる」と思われたようで、2000年の秋頃、学生主体NPO法人である当会へ業務委託の話がきたのが当会主導となった契機といえる。

企画・運営を行う「学生実行委員会」の具体的な活動としては、まず「地域の活性化」などのコンセプト決めから、それを形にするための資金集め(募金活動・協賛金集め)、チーム募集、全国のよさこいまつり参加などによるPR活動、業者との交渉など、「ほぼ全てのこと」を行った。

正直、これら全てのことを「ボランティア(無償)」で、且つ学生だけで行うのは、「かなりチャレンジングなこと」で、途中中学生実行委員のモチベーションが下がったり、思うように協賛金が集まらないなど、いろんな問題にぶつかった。しかし、全国のよさこいまつり(北海道のYOSAKOIソーラン祭り、大阪いこいまつりなど)に参加する中で、我々がコンセプトに据えていた「人が輝く、街が輝く」という「想い・目標」を再認識し、それを実現したい一心で、それらの課題や問題を乗り越えることが出来たといえる。結果として、まつり当日は、「4ステージ、51チーム、踊り子約2,000人、観客動員数約4万人」という大盛況の内にまつりを終了することが出来た。

まつりを終えて、一緒にまつりを創り上げた学生実行委員から、「やった分だけ喜びや達成感があった!」「大学生でもここまでできるんだと実感した」とか、表舞台に立たない裏方で尽力した実行委員会のメンバー達が、異口同音に「実行委員会に参加してよかった! また、来年もやりたい!」といった感想を漏らしていた。

実行委員長の私も、大学4年生でまつりの企画・運営責任者として携わった経験は、社会人になっていろんな面で役に立つ経験だったと実感している。また、その時、一緒

にまつりを創り上げたメンバーとは今でも、「一生涯の友・同志」として仲良きさせてもらっており、貴重なご縁もいただくことができたといえる。最近では関東に在住しているため、なかなかまつりに参加できていないが、20年以上たった現在も「神戸よさこいまつり」として学生主体でまつりが開催され続けていることに、大きな喜びを感じている。



## 2002

さかがみ そうへい  
**阪上 荘平**

当会レクリエーション事業部元代表  
 元・当会財務担当理事  
 2004年卒

### サタプロについて

2002年5月から、当会における新たなレクリエーションイベントとして、サタデープロジェクト(以下、サタプロ)が実施されるようになりました。このイベントは、毎月いずれかの土曜日に定期的に小学生を対象としたピクニック、バーベキューなどを実施するものです。

社会的な状況としては週休2日制が完全に施行された年。ミッションは「子どもたちが暇を持て余しているだろう。それを何とかせなあかん!」というものです。

当時、組織的にも大きな課題がありました。宿泊キャンプは重要なものですが、いきなり泊まりに参加させることはハードルが高く、ましてや当会は胡散臭い名前の団体。入口として気楽に参加でき、お試ししてもらえ日帰りイベントが必要でしたが、当時は散発的なものしかなく、戦略的に当会のことを子どもたちや保護者に知ってもらえる機会がなかったのです。

そこで、毎月、子どもが一日中大学生と思いきり遊び、その間保護者はのんびりでき、学生ボランティアは敷居を低く子どもと関わる機会が得られ、団体としても子ども・保護者に魅力を知ってもらえる機会になるwin-win-win-winなものとして実施されることになったのでした。

蓋をあけると、参加申込が殺到。初日の申込が終わった後、送られてくる大量の参加者リストを眺めながら、とんでもないことになった・・と副責任者と顔を見合わせました。

初めての試みは狙い通りの効果を発揮。サタプロに参加してくれた子どもたちにより夏のキャンプも今までにない数の応募があり、それからのレク事業を左右する革命的な事業となったのです。

僕個人としては、毎回楽しみに来てくれる子どもたちの笑顔が見られ、その子たちがキャンプにも来てくれること、学生たちが子どもたちと関わって喜んでくれることは本当にやりがいがありました。代償は大きいものでした。年間連続16回も計画、実施するという未曾有のイベントの上、「仕事を振るのが苦手」という僕の特性もあり、準備は大変でした。何度事務所に泊まって始発で帰ったのか覚えていません。ストレスがたまりすぎて僕が夜中の事務所で剣道の素振りをしている姿は不気味な亡霊として複数人に目撃されています。

相当無茶しましたし、社会人になってからもこれ以上の1年間を経験していませんが、常に周りの先輩や仲間が助けてくれ、誰よりも副責任者が支えて一緒にやってくれたおかげで何とか生還できたと心から感謝しています。何より、目の前の子ども達のために動く、というのは今の僕の児童相談所での仕事にもつながっていて、当会での、サタプロでの体験は、間違いなく僕の人生を変えるものでした。

## 2003

たつみ まりこ  
**辰巳 真理子**

元・当会総合事業局長  
 2003年卒

### 総合事務局・釜ヶ崎ワークキャンプ

関学学習指導会がNPO法人ブレインヒューマニティー(以下、当会)として歩み始めて約1ヶ月後の2000年4月、筆者はいつの間にか当会のボランティアの一員になっていた。翌年2001年8月、当会初の高校生を対象としたフィリピンでの住居建設ワークキャンプ(三菱銀行国際財団助成・ハビタットフォーヒューマニティーインターナショナルと共催)の実施に際し、次年度の総責任者を引き受けることを前提にスタッフとして参画することが決まった。恐ろしい組織である。2002年4月、5つ目の事業部として総合事務局が誕生する。初代局長は平阪敦司氏、ミッションステートメントは以下の通りである。

「総合事務局は、当会の使命のもと、先駆的な事業開発と柔軟な事業の見直しにより、子どもをめぐる様々な社会の変化に対応する」

補習事業部(当時)以外にも高校生を対象とした事業を実施することで、いずれ彼らが大学生になった時にボランティアとして当会の運営を支える人材になること、また西宮市や兵庫県からの委託事業による組織の収益安定化などが総合事務局に求められた成果であった。

筆者が総責任者を務めた第2回高校生フィリピンワークキャンプでのパスポート置き忘れ事件の後処理もひと段落

し、平阪氏から局長を引き継いだ2002年の秋頃のこと。ワークキャンプに参加した高校生が、フィリピンの貧困問題について自分たちの日常から縁遠いことと受け取っていることが気になった(むろん、解決にコミットすることを思うと果てしない)。

国内でも貧困が確かにあること、そしてそれは自分たちの日常過ごす場所とさほど離れていないことを知り、考えてもらいたいと、高校生釜ヶ崎ワークキャンプを開催することとした。大阪府西成区にある日雇い労働者のまち・釜ヶ崎で2泊3日を過ごしながらかき出しや夜回りに参加するフィールドワークである(その後、高校生だけでなく大学生も対象とした)。

委託事業の規模の大きさやそのマネジメントに右往左往しながらも、新規事業を立ち上げてよいという土台に私自身が育ててもらったように思う。当時の答え合わせは、20年以上経って、ふとした瞬間にやってくる。何かをやりきる経験、それを基にして生まれた関係性は、間違いなく今を支えている。昨秋、2003年の釜ヶ崎ワークキャンプ参加者と再会した。いまだにあの町と、おっちゃんたちと出会ったインパクトを覚えているらしい。

## 2004

やまぐち まさし  
**山口 真史**

元・当会総合事業局長  
 2004年卒

### 海外事業いろいろ

当会の海外ワークキャンプの歴史は、2001年の高校生フィリピンワークキャンプから始まりました。国際NGOのHabitat for Humanity Internationalとの協働で低所得者層向けの住居の建設を、そのサイト内でホームステイをさせてもらいながら進めるプログラムです。2001年当時、海外へのワークキャンプやスタディーツアー自体もまだまだ珍しく、さらに高校生を参加者として開かれていたものは周りにはないプログラムだったように思います。

翌2002年にはフィリピンに加えて、アメリカでのワークキャンプも同じくHabitatのプログラムを用いて行われました。アメリカのワークキャンプでは現地団体のCenter for Service Learning Opportunities in Educationとの協力で、ワークサイトでのホームステイではなく現地高校生の自宅に1人ずつホームステイをしながら、現地高校生とともにワークに励みました。

2003年から2005年春まではフィリピンでのワークキャンプを軸に、  
 ●2003年3月インド(震災復興×Habitat)、7月タイ(好善社@ハンセン病療養所)、フィリピン(SARSのため中止)  
 ●2004年3月マレーシア(植林×オイスカ)、8月フィリピン(Habitat)

●2005年3月イラン(震災復興×CODE海外災害援助市民センター×AHKK働く子供を守る会)にてワークキャンプが行われました。

このようにワークキャンプの活動の幅は、当会関係者の繋がりや大学生スタッフたちによる関心ある分野へのアポイントなどによって広がっていきました。またこの時期は、活動を広げるために助成金を申請し、参加費の軽減などにも励んでいました。高校生向けのワークキャンプという活動が世の中にほとんどなかったため、助成団体からは広く採択していただけたこともワークキャンプ事業にとっては追い風となっていました。

その後、最初期から軸となっていたHabitatの活動は、日本支部の設立によって関係性が変わってしまい、継続が難しくなっていたように記憶しています。またその一方で、1人の大学生のアポイントから動き出し、今でも続いているマレーシアでのワークキャンプが作られていったことは、その頃の当会の活動を象徴するような出来事となりました。

この時期はワークキャンプなどの海外事業は、総合事業局の中の一事業であり、事業部として独立していませんでした。総合事業局も「ワークキャンプしかしていない」と言っても過言ではないぐらいの状態でした。そして、まだ生まれたてのワークキャンプ事業には当会らしい確固たるルールもなかった時代でもありました。その中で事業が企画され、実施されるたびに、大小さまざまなトラブルが降りかかりながらも、参加している高校生たちの成長を感じることができる時期でもありました。草創期らしくとても刺激的な時期と言えるのではないのでしょうか。



## 2005

きたむら よりお  
北村 頼生

元・当会事務局長  
2000年卒

### 勤続10年の事務局長

2005年当時は、基幹事業に加えて、海外事業や委託事業も軌道に乗りはじめ、法人としての予算規模も活動の幅

も広がりつつある時期でした。経営陣もエネルギーでユニークな学生が多く活気に満ちていました。ただ一方で、それを支える事務局は、職員の退職が続き、理事長が事務局長も兼務するような状態。事務所内も業務もぐちゃぐちゃだったと記憶しています。入社したばかりの私の最初の任務は、請求さえしていなかった家庭教師や塾の月謝を、過去数年に遡って回収すること。電話しながら頭を下げたのを今でも鮮明に覚えています。その後も、設立10年目の団体がさらに飛躍していこうとする中、後方業務が脆弱ではいけないと、1つずつ環境の整備に努めてきました。また、まだまだ職業としての認知が低かったNPOが、若者たちの選択肢の1つとなればと、その労働条件やステータスの向上を目指し励みました。

入社からの10年間、委託事業の拡大、駄菓子屋の開業、関西カタリバの発足、東日本大震災の復興支援、生活困窮者や障がい児への支援、旅行業への対応、3つの子会社の設立など、目まぐるしい変化の時代を迎えることとなります。預金残高が数万円という危機を経ながらも、予算規模が台の1億を突破したのもこの頃でしょう。

思いおせば20年前、募集枠もない時期に雇ってくださり、その後の退職の我儘まで聞いてくださった能島理事長や仲間たちには感謝の言葉しかありません。退職時にいただいた「頼生はプレーンヒューマンティアーという組織からはなくなるが、プレーンヒューマンティアーのコミュニティの中には存在し続ける」という言葉にも救われました。面倒見も悪く、大した能力がある訳でもない私が、何を残せたかは今でも分かりません。ただ、先人からバトンを受け取り、バランスとしての役割を担いながら、後輩たちが思いっきり活動できる土台だけは残せたのではないかと考えています。

今となっては職員も一新し、法人も安定期の新たなフェーズを突き進んでいます。この区切りに今一度「学生だからこそ」「当会だからこそ」できることを見出し歩いてほしい。そしてこれからも、若者たちが本気でぶつかり、成長し合える場であり続けることを願っています。

## 2006

たなか あきまさ  
田中 章雅

元・当会副理事長  
2002年卒

### BHで起こった珍事件簿

そもそも、お題が難しい。「BrainHumanity で起こった珍事件簿(2006年当時について)」。珍事件はたくさんあったが、記録に残してもいいものは少ない(記録に残してはいけないものほど、すぐに思いつく)。しかも、2006年とは何があった年かすら、私の記憶力ではまったく思い出せ

ない(誰が誰の後輩か、サブプロの総責(総責任者)に換算しないとわからない)。と、ここまで書いて「総責」が一発変換されないことに、今更のように時間の流れを感じた。昔は当然のように一発変換されたのだが。

2006年のデータを少し検索してみた。私自身が総責を務めた「プレサタ2006」を開催した年であった。当会史上初の定員無制限イベントである。これなら、自分がやったイベントなので、多少書いても問題ないだろうと少し安心した。

写真データを開いてみると懐かしい。今では公益財団法人の代表になっている方や、小学校で先生をしている方が「正義のヒーロー」に扮していた。ちなみに、「悪の大魔王」は大手銀行職員。社会人となった今では考えられないほど、みんなが真剣に子どもたちと遊んでいた。

当日の企画は、関学のキャンパス内で「指定されたスタッフ」を探し、暗号を解いて封印された宝箱に眠る「サブプロの精」を助けだすというもの。このためだけに人間が入れる巨大な宝箱を作成し、イベント前日に事務所から搬出しようとしたときに、宝箱が事務所扉より大きいことが発覚。仕方なく一度解体し、現地で再度組み立てなおすという重労働をすることになった。事前にサイズを測る重要性を学んだ。ちなみに、イベント当日、「サブプロの精」である女性スタッフは真っ暗な宝箱に2時間ほど閉じ込められた。携帯電話の明かりだけが頼りだったらしい。

そもそも、「プレサタ」という企画(定員無制限のイベント)そのものは、西宮北口駅前の王将で、当時理事長だった能島さんと食事の雑談の中で生まれた。夕食のとき、常務会が終わってみんなで銭湯に行くとき、銭湯帰りにかすうどんを食べに行ったとき。本当にたくさんの雑談の中で様々な企画が生まれた。冗談のようにしゃべりながら、子どもたちのことを考えてイベントをする。今でも続いている当会の真理のようなものがそこにあり、本当に自由だったと今でも感じる。

教員をしていると毎年卒業生が生まれ、いわゆる「教え子」というものができていく。長く当会で活動をさせてもらって、昔参加者だったスタッフ、昔参加者だった教え子も生まれた。そして、今年はずいに教え子が、当会の企画管理者補になった。自分がスタッフとしてイベントに関わっていた頃、参加者とスタッフのサイクルがこれからも続いてほしいと思っていたことが、確実に現実になっている。

## 2007

いまい ゆうすけ  
今井 悠介

元・当会不登校関連事業部代表  
2008年卒

### 不登校支援の拡大

私が不登校関連事業部長を引き継いだのは2006年秋の

こと。事業部長を務めた3年間で一貫して取り組んだテーマは、「不登校状態にある子どもたちの選択肢をいかに増やすか」ということだった。

不登校状態の子どもたちに共通しているのは「学校に行っていない」という事実だけで、一人ひとりの背景や置かれている状況は実に多様だ。それは研修で学ぶだけでなく、子どもたちとの出会いを通じて私自身常々感じてきた。

様々な状況にある不登校状態の子どもにとって、訪問型学習支援(HEP)と居場所づくり(キャンプやイベント)だけで、十分な選択肢を提示できているのだろうか。大学1回生の頃に、HEPだけでなくレクリエーションや国際ワークキャンプの活動にも参加してきた私は、当時の不登校関連事業部が子どもたちに提示しているメニューに、大変生意気ながらも疑問を抱いていた。

事業部長になる直前にスタッフとして参加した国際関連事業部のマレーシアワークキャンプ後にこんなことを思っていた。

「HEPで関わってきたあの子たちが、ティウロン村での生活を経験したら、どんな変化があるのだろうか。中にはそんな機会を求めている子もいるんじゃないだろうか」

今考えれば、何の根拠もない思い付きであり、妄想に過ぎないアイデアだ。「不登校関連事業部でそんなことやって何になるのか」と批判されたこともあった。

しかし、能島さんだけは面白がってくれた。「わからないからこそ、やってみたらいい。そこで起こった子どもたちの変化に目を向け、プログラムの意味を見つけることが、我々の役割なんじゃないか」と言ってくれた。

2007年の夏、私たちは不登校の子ども向けの「マレーシアワークキャンプ」と「富士登山キャンプ」を同時に立ち上げた。しかし、いずれのキャンプも中止となった。最少催行人数を満たせなかったからだ。それでも、1つだけ希望を持てたのは、応募は「ゼロ」ではなかったことだった。この機会を求めている子どもがいることは確かだった。

翌年、私たちは予算や最少催行人数の設計、広報手段を全面的に見直し、もう一度2つのキャンプを立ち上げた。再挑戦の結果、いずれも参加者が集まり、実現することができた。

キャンプでは、子どもたちが今まで見せてくれたことのない表情を見せてくれた。これまでにない参加者同士の関係性の深まりがあった。マレーシアに行った数ヶ月後に突然学校に行き始めたという保護者からの長文の手紙も届いた。もちろん再登校だけが私たちの目的ではない。しかし、ひと夏の体験がその子の人生に何らかの影響を与えたことは間違いない。

2024年現在、不登校児童生徒数は過去最多となっている。しかし、その意味合いは18年前と今では異なる。不登校の子どもを学校に連れ戻すのではなく、学校以外の場を含めた多様な選択肢をつくり、支えていくことの重要性を多くの大人が認めている。不十分ではあるが法律や政策もそのように動いている。少しずつではあるが、18年前に私たちが目指してきた方向に社会は進んでいると思う。

## 2007

つるまき こうすけ  
鶴巻 耕介元・当会副理事長  
2007年卒増えるボランティアとHRM  
(Human Resource Management)

私が関わりを持った2004年当時は、3～4回生の「レジェンド」方の顔も見え、コミュニケーションをしっかりと取ってくれた記憶がある。4年間この場所で活動すれば、ああいう風になれるんだと憧れた。また、1回生の同期も比較的把握できる人数であり、このメンバーで当会の次世代を担っていくんだという感覚もあった。

そんな1回生の冬、「人材管理の役員をやらへんか」という声がかかり、なぜ財務も顧客管理も規定も興味がないことが分かるんだろうと感動しながら、狙い撃ちしてくれた人材管理の役員を2年(諸事情により実質3年)務めることになった。

私が人材管理(と呼ぶにはほど遠かったが)を担った3年間は、イベントとボランティア数が共に激増していった時期だと記憶している。鶏が先か、卵が先か状態ではあるが、「また新規イベント増やすの?」「フレッシューズキャンプにこんなに応募くるの?」という思いが次々に湧き上がっていた。

新しいボランティアの獲得については一定の成果を出せていたように思うが、当会が常に抱える、燃え尽きや逃亡といった課題にはほとんど手を付けられず、人材管理という役割はボランティアを獲得するだけが仕事ではないと痛感することも多かった。自分が数多のボランティア説明会を開き、それに共感して来てくれている数多の後輩に対して、いい場をつくれていない気がして悩んだ。

そうした中、自分が下級生の頃に先輩たちがふと語った言葉を結構覚えていて、心の支えになっていることに気が付き、そうした知見の伝達を少しでも仕組み化できないかと思った。そして、「BH大学」なる、卒業生が講義形式で下級生に授業を行う企画を立ち上げ、なんとかして先輩から後輩につないでいく当会のDNAを残せないかと駆け回った。

記憶が定かではないが、イベント後の振り返りを必ず行うことをルール化したような気もする。

新入生向けチラシの種類を増やせ、新歓の回数を増やせと理事長に言われ、「簡単に言うなこの小太りが!」と思ったが、深夜のラーメンと銭湯で懐柔させられ、それらのことごとくが結果として現れることに震えた。

悩む後輩がいれば、事務所の隅やら下宿先やらで話を聞いた。

当会は子どもたちに多様な価値を与える団体のはずだが、自分は常に、内部のボランティア、特に後輩ばかりに目を向けていた4年間だったように思う。

## 2008

やない ゆうき  
箭内 佑己駄菓子屋本舗やなや初代店長  
2008年卒

## 駄菓子屋本舗やなや

夙川にある小さな駄菓子屋さん。約6年間、後輩たちが子どもの居場所として運営し、私はたった1ヶ月の店長でしたが約1年間の立ち上げ期を振り返ります。

当初は「青少年の居場所としての駄菓子屋」と「第2のボランティアスペースの開設」を2本柱に、不動産物件購入から取組むプロジェクトでした。

プロジェクト始動前、「イチ学生が責任を持てる事業ではない」と、当時理事長の能島さんに伝えたとこ、その返答は「責任は俺がとるから覚悟だけでよい」でした。

その言葉を信じて走り続けましたが、学生が挑戦してきた組織のDNAを実感することになります。

居場所のあり方検討、駄菓子屋の店舗経営関連、物件売買交渉、金融機関からの借入交渉、寄付募集活動、メディア露出等の広報、物件は売買契約に至らずカミヤビルオーナーにプレハブを無償貸与いただき、紆余曲折のオープン。

物件を購入できなかった結果だけを見ると失敗ですが、多くの方の応援・ご支援はなよりの成果でした。

関西・東京開催のOBOG会での沢山の出会い。

東京での活動の面倒を見てくださったOG。

外部からの寄付申込と複数の応援のお電話。

ロゴ提供・寄付申込をいただいたデザイン会社社長。

場所と立派な看板の提供に加え、オープン後も見守って下さった上谷社長。

挙げるとキリがありませんが、あれほど多くの方々に応援いただき、心の底から感謝をした経験は初めてでした。

プロジェクト承認を得る理事会で能島さんから珍しくお褒めいただいたやりとりがあります。

「駄菓子屋オープンにおいて地域の理解は得られるのか?」

「我々が子どもにとっての地域側です」

メンバーと毎日話し合い、まだ見ぬ子どもたちのことや居場所の存在意義に向き合ってきた結果、自然と出た回答でした。

実際に2009年2月23日のオープン後は地域の方々にも見守っていただき、多くの子どもたちが来てくれました。「全校朝礼で紹介しといたよ!」とうれしい言葉をもらったり、毎日の様に来る常連さんでもできたり、居場所として機能して

いたと思います。

居場所は場所のみならず人がいてこそ成り立つものです。学生ボランティアが日常として運営する難しさがあったと思いますが、長い間、居場所を提供し続けてくれた後輩たちに感謝です。

最後に、  
「すべての子どもたちが輝ける未来を」

当会がそれを実現できる組織であり、学生にも挑戦の場を提供してくれます。

私にとっての居場所でしたし、心からの感謝を学ばせてもらいました。

これまで多くの方の沢山の想いが託された30年だったと思います。



## 2008

さいか ゆうた  
雑賀 雄太元・Chance for Children代表  
2009年卒

## CFCプロジェクト開始

日本でも「子どもの貧困」という言葉が少しずつ聞こえてくるようになった2009年。CFCプロジェクト(子どもの貧困撲滅プロジェクト)がスタートしました。

CFCプロジェクトとは、教育の力で貧困の連鎖を食い止めることを目的に始動しました。当初の事業スキームは、寄附金を募り、それを元手に学校外教育クーポン(パウチャー)を貧困世帯の子ども(当時は生活保護世帯の児童・生徒)に発行し、本人の希望する学校外教育の機会を担保するといったものでした。

当プロジェクト始動の起点となったのは、当時理事長であった能島さんとの真夜中の会話だったと記憶しています。上記の事業アイデアを能島さんに話していただいた瞬間、私

の頭の中でプロジェクトが社会に浸透していくイメージが一気に広がったのを今でも覚えています。

ただ当初、メンバーは私以外おらず、私にあったのは「根拠のない自信(?)」と「事業スキームに対する確信」だけでした。その後は、自身の驚くほどに低い事務能力、そして共感を得られない低いコミュニケーション能力に打ちひしがれることになりました。ただそんな状況でも、自分なりに精一杯業務と向き合っていくうちに少しずつ私を助けてくれる仲間が出てきました。その結果、プロジェクトは少しずつ前進してきました。そして、初年度当プロジェクトをスタートさせる上での最大の課題でもあった資金調達を、ブレインヒューマニティーの全ボランティアを巻き込む形で街頭募金を複数回実施し、成功させることができました。

実際に街頭に立ち、協力してくれる方々の声を聴き、その姿を目の前のすることで集まったお金が「現在の社会を担う人間たちから、未来の社会を担ってゆく人間たちへの投資なのだ」ということを肌身で感じることができました。ここでこの体験を当時のメンバー全員で共有できたことはこのプロジェクトを進めていく上で、とても大きな価値があったように今では思います。

2009年に始動した小さなプロジェクトが、現在まで多くの人々の努力によって脈々と紡がれ、今まさに社会に影響を与え変革を起こし続けていることを心からうれしく思っています。

最後に、プロジェクト始動時に掲げたミッションを。  
「すべての子どもに機会を。すべての子どもに夢を」

## 2010

いはら あつき  
井原 充貴元・当会副理事長  
2010年卒

## 参加者からボランティアへ

もうすぐ、息子が5歳になる。私が阪神・淡路大震災で被災したときと同じ年齢である。月日が経つのは本当に早い。

震災によって、住んでいた家は半壊した。私は、復興に向けて奮闘する両親と離れ、半年以上、島根に住む祖父母のもとで避難生活を送った。避難先の保育園に馴染むことができず、寂しい思いをしたことをよく覚えている。そんな私を心配した母が、たまたまキャンプの案内を見つけ申し込んだことで、関学学習指導会と出会った。以降、長期休みのたび

に同会主催のキャンプに参加する常連となった。

さまざまな企画を提供してくれた当時の大学生リーダーには申し訳ないが、お風呂上がりに卓球をしたことが一番記憶に残っている。

その後、成長し、大学入学が決まったのちに、縁あってBrainHumanityの活動にボランティアとして関わることとなった。年間イベントの会計や、事業部の運営などに携わり、最終学年のときには副理事長として情報管理・顧客管理を担当した。お世話になった大学生リーダーへの恩返しの意味を込めて活動をしていた、という聞こえが良い。事実、私自身が周囲にそのように話していたかもしれない。しかし、実際は違っていた。目的達成のためにチームで一生懸命になることを望んでいたように感じる。おそらく幼少期に、子どもたちに楽しい時間を提供しようと大勢で奮闘する、お兄さんやお姉さんを見たことが影響したのであろう。

BrainHumanityの活動は、公益性が高い。それゆえ、周りには従事する者が美しく映る。一方で、世間に見えない部分は、実に泥臭い。1つのイベントをつくりあげるために、しなければならないことはたくさんある。思い通りにいかず、度々、逃げ出したくなるような衝動に駆られる。お金もかかる。時間もかかる。続けることが難しい。それでも、あきらめず皆で完遂したときの達成感は何事にも変えがたい。数多くの仲間とたくさんの汗や涙を流す濃厚な日々の連続であり、喜怒哀楽、さまざまな感情を味わった。社会の厳しさ、楽しさを学ぶことのできた充実の4年間であったと思う。

そして現在、私は障害者の社会参加を後押しするため、デジタル障害者手帳の普及に取り組んでいる。社会インフラをつくる、壮大なプロジェクトである。その分、苦勞も絶えないが、目的の達成に向けて多くの人と尽力し、社会を少しでも良い方向へ動かしたい。

亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていくことを、改めて誓う。



## 2010

わかまつ しゅうへい

### 若松 周平

株式会社YEVIS代表取締役

#### 株式会社YEVIS設立について

株式会社YEVIS(以下、えびす)は、阪神地域で障がいのある子どもとその家族に対する支援事業を行なっています。

ブレーションヒューマニティー(以下、当会)とNPO法人みらいず2(以下、みらいずおよびみらいず2(注:みらいず2は関連法人である株式会社レーベルから出資))の共同出資、協働により2010年に設立しました。

それまで、両法人は、学生が活動の担い手の主体である団体同士として、トップマネジメント研修の企画実施など、親睦を深めてまいりました。

それぞれの活動展開を構想する中で、単体の限界を確認し合い、協働の可能性を探る中で、2008年度に阪神地域での活動展開が構想されました。

当初は、みらいずの一部署としての展開を模索し、そこに当会が協力する構想でした。その後に検討を重ねる中で、人材と資金を出し合い、協働を確実なものとしていくための手段として、株式会社の新設が最も合理的であるという判断となりました。

当時、NPO法人が出資し、営利法人の株式を保有して事業展開をおこなう先行事例はあまり見受けられませんでしたので、その後の活動モデルの1つとなったと捉えています。

その設立を前提に、2009年度にみらいずの職員である若松周平が、非常勤職員として当会に出向、総合事務局を担当しました。そこで、駄菓子屋事業や兵庫県ビジョン課との協働事業である集落ワークキャンプ、Chance for Children事業の立ち上げなどを担当し、職員や学生らと、当会のマインドや価値観を共有しながら、今後のえびす事業での協働の可能性を模索しました。

そして、2010年2月1日、当会事務所小会議室内に株式会社YEVISを設立しました。当会からは阪上宗平を出向、みらいずからも若松に加えてもう1名の職員出向を受け、創業しました。

その後、2010年4月からは、居宅介護・移動支援事業を開設。2011年1月から、障がい児の通所支援事業「えびす夙川」(阪急夙川駅最寄)を開所、2012年8月には同じく「えびす本山」(JR摂津本山駅最寄)、2015年4月には「相談支援センターえびす」を開所し、子どもはもちろん、成人

後も、その家族のサポートを含めて実施する活動展開となりました。

2023年末現在で、顧客数は約150名、職員と学生活動者を合わせて約40名の事業規模となりました。今後も、当会とみらいず2のビジョンを踏まえて、社会的なニーズをとらえながら事業を展開して参ります。



## 2011

おくの さとし

### 奥野 慧

元・当会国際関連事業部代表  
公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(CFC)共同代表  
2008年卒

#### 東日本大震災

2011年3月11日、東日本大震災。当時、当会は、阪神・淡路大震災の経験を活かした支援を行うため、被災者とNPOの支援をつなぐ取り組み(通称「つなプロ」)を全国のNPOと連携して実施していました。つなプロは、避難所で支援が届きにくい方々に、アセスメントから必要なサービスや物資提供を行う取り組みです。私もスタッフとして震災から2週間後に宮城県石巻市に入りました。街の真ん中に流れ込んだ漁船、基礎だけが残った家々、流れついた魚と街を覆う生臭さ。一瞬で絶望感に襲われたのを覚えています。

それから緊急支援を数ヶ月行いましたが、子どもたちの環境は一向に改善していきません。何もかもを流され、失い、希望が見えない子どもたち。我々にできることは何かを日々考えていました。

学生時代、私はワークキャンプで子どもの課題や中高生のキャリア支援に触れ、同時に能島氏から当会の歴史、文化についてよく伺いました。震災当時の話。子ども支援の重要性。そして、理想の社会や当会の使命について。そんな学

生時代を過ごした私にとって、東北にいる自分が子ども支援を始めることはある種の必然でした。

2011年6月20日、当会からスピンオフしてCFCが生まれ、東北で活動を始めました。CFCの取組みは、寄付を原資に学習や体験で利用できるクーポンを子どもたちに提供するものです。また、学生ボランティアが子どもに伴走し、相談支援も行っています。当時、大規模災害時には、①多数の子どもたちの支援、②ニーズや環境に応じた個別支援、③地域の担い手(=教室やクラブ)の復興支援が重要でした。その観点から、学習や体験を直接提供するのではなく、クーポンを助成し、子どもが学びの場を選ぶ。地域と子どもがつながり、お金もまわる仕組みを選びました。

最初のクーポン提供は1,700人の応募に対してわずか150人。ほとんどの方に落選通知を送ったことは今でも忘れられない悔しい経験です。一方で、子どもたちから「一筋の希望だった」と言ってもらえたことが何よりの支えでした。

活動を続ける中で、就職や進学をして巣立っていった子、地元で働き、その支えになっている子もいます。当時被災をした子どもが学生ボランティアになっていたり、寄付者になって支えてくれていたりします。阪神・淡路大震災、東日本大震災を経て当会が託してきたバトンは、東北の地にもつながり、今もなお若者たちに受け継がれています。

## 2011

きたの まなみ

### 北野 愛実

元・関西カタリバ事務局副代表、ディレクター  
当会元学生職員  
2015年卒

#### 関西カタリバ創設期

2011年度は、関西カタリバにとってのはじまりの1年でした。総合事務局の学生が東京のカタリ場に参加したことをきっかけに、関西でも実施したいという動きが後輩に引き継がれ、2011年度に神戸市の委託事業により初めて実現しました。

カタリ場は、大学生数十人が高校に出向いて、高校生と本音で語ることで、将来に向けて一歩踏み出すきっかけを作るキャリア教育の出張授業です。その背景にあるのは、ニート・フリーター、学習意欲の低下、所得格差などによる教育格差、早期離職者の増加など、若年層に蔓延る様々な社会課題。高校進学率が98%にのぼる現代において、日本の明日

を担う高校生が将来の“なりたい姿”や“憧れ”を持ち、主体的に一步を踏み出せるように。高校生の“心に火を灯す”ために、カタリ場が行われます。

第1回目は、須磨翔風高校企画。当時の総合事業局局長をプロジェクトマネージャー(PM)にたて、コアスタッフ(コア)を含めた運営メンバーは7名。何もわからない中、手探りで大学生スタッフに対する説明会や練習会など準備を進め、本家のNPOカタリバのサポートもあり、初めて高校生にカタリ場を届けることができました。

カタリ場では、大学生1人と高校生複数人が体育館等で車座になり、ワークシートを使ったり、紙芝居形式による大学生の体験談を聞いたりしながら、高校生が自分自身や将来について思っていることを対話で深掘りしていき、授業の終わりには、明日から行動できる目標を“約束”として落とし込みます。親でも、先生でも、友達でもない、高校生にとって少し先の人生を歩む、利害関係の少ない“ナナメの関係”である大学生だからこそ、本音を打ち明けやすい。授業の初めはおちゃらけていた生徒の目の色が、対話を通して変わっていく様子。反対に大人しくて無口だった生徒が、ぼろっと本音を口にしてくれた瞬間。授業の終わりに、PMから高校生へ思いをのせたまとめの言葉が届けられた後、高校生と大学生、時には先生をも巻き込んで談笑し、なんとも言えない優しくあたたかい一体感に包まれる体育館。関西の高校で初めて届けられたその“場”は、運営メンバーはもちろん、その光景を目の当たりにした大学生の多くを魅了しました。

その後、2011年度のカタリ場は、第2回六甲アイランド高校、第3回東播磨高校、第4回夢野台高校、第5回日吉ヶ丘高校、第6回神戸高塚高校、と続きます。企画を重ねるたびに、カタリ場に引き寄せられる仲間が増えていきました。そして企画がまだ少なかった当時は、1つ1つの企画に全力を注ぎ、一丸となって取り組むことができた時期でもありました。この場を次に繋げるにはどうするべきか。私たちが高校生に届けようとする単発授業には何の意味があるのか。新たな高校生に出会うたび、話し合いを重ね、次へ次へとバトンが繋がれていきました。組織面においても、事務局体制が少しずつ整い、2011年度のPMとコアを担ったメンバーのほとんどが、その後数年間のカタリバ創設期から成長期に渡って、カタリバの体現者として、中心的な存在を担います。

「カタリバには不思議な力がある」

これは、当時の担当職員の言葉です。カタリバは、人の本音を引き出す、人の心を動かす力がある。高校生にとってだけでなく、大学生にとっても。かく言う私も、友達と参加した新歓で誘われるがまま第1回企画のコアになり、あれよあれよという間に、第4回企画PM、事務局、ディレクター、学生職員、と大学生活のほとんどをカタリバに捧げた1人です。幸い

にもカタリバ創設期の熱気を間近で見届けることができた私にあったのは「自分にはカタリバを次に伝える使命がある」一心でした。そう思わせてくれたのは、創設期を引っ張ってくれた偉大なる先輩方であり、そんな先輩方は“憧れ”で、一歩先から見守って気づきを与えてくれる、まさに“ナナメの関係”でした。

多くの高校生や、私にとってそうであったように、“人の心に火を灯す”場がこれからも続きますように。そして私自身、カタリバ卒業生として恥じぬよう、かつて授業の終わりに高校生と交わした“約束”を改めて思い出そうと思います。



## 2012

さかぐち ゆうすけ

### 阪口 祐輔

元・当会副理事長  
2012年卒

### チャレンジのバトン

毎週土曜・日曜日にイベントを――。

今考えてもぞっとするこんな発想を基に、私が事業管理担当理事を務めていた2012年度は、日帰りイベント実施数77日(前年度比175%)という怒涛のラインナップで企画を展開していた。各イベントの立案や本部スタッフの確保のために事業部も奔走していたが、圧倒的に足りていなかったものがひとつ、企画管理者である。企画管理者の役割は、各イベントが適切かつ安全に運営されているかを管理することであるが、本部スタッフの経験などが求められるため、誰もがができるわけではない。事業管理担当理事としても、企画管理者不足によりイベントができない事態は避けるべく、企画管理者の増員・育成に頭を抱える日々が続く。一時的にだが年間イベント5本とキャンプ3本の企画管理者を兼務せざるを得ない状況だった頃は、朝か

ら晩まで事務所に入り浸り、職員と間違えられることもしばしばであった。

やりたいこと・やるべきことがあふれている大学生活4年という長いようで短い期間の中で、本部スタッフを経験し、さらに企画管理者として活動を継続していくということは、今思うと相当な「物好き」でなければできないことだったかもしれない。ただ、意外と周囲にはそんな「物好き」も多く、結果としてあれだけのイベント数を遂行できたのである。本部スタッフに手を挙げる学生の動機は実に様々で、「楽しそうだから」「友達に誘われたから」「運営に興味があったから」…。動機は違えど、皆チャレンジしていく。そのチャレンジを受け止め、二人三脚で導いていく存在が企画管理者である。「物好き」たちの原動力は、やはり自身の過去のチャレンジを誰かに受け止めてもらったからだろう。私自身、2泊3日でキャンプファイヤーもせずひたすらピタゴラ装置を作るという極端なキャンプへのチャレンジができたのは、受け止めてくれた人がいたからなのだ。

現在の職場で後輩や部下と接する際、今でも時折、当時の活動を思い出す。厳しく接しすぎたと反省することも多々あるのは(本当に反省しています)、どんな組織でも同じである。30年という長い間、絶やさずイベントやサービスを提供できているということ。それは誰かのチャレンジを今も誰かがしっかりと受け止めているということ。この素晴らしい環境をどうか絶やさず、たくさんのチャレンジが開くことを願っている。

## 2014

ふくい くにあき

### 福井 邦晃

元・当会副理事長、職員  
関西教育旅行株式会社代表取締役  
2014年卒

### 関西教育旅行株式会社設立

2014年1月6日、関西教育旅行株式会社(以下、KET)が設立され、当時、当会の事務局長を務めていた北村頼生氏(以下、北村さん)が代表取締役、理事長の能島裕介氏(以下、能島さん)が専務取締役として就任されました。設立にいたるきっかけは、震災以降、20年近くにわたって続けてきた子ども対象キャンプにおいて、「①公に広く参加者の募集を行い、②受益者から対価をいただき、③宿泊・交通のいずれかの手配が含まれる」ことを理由に、旅行業法に抵触すると

の指摘を受けたことでした。当会から1,200万円を出資しての100%子会社の設立は、創立20周年にふさわしい一大イベントでした。周年記念パーティー開催に便乗して「事務所内フリースペース改装」の話も持ち上がり、本当に大きく変化した1年だったと記憶しています。私自身、翌年2015年4月1日にマレーシア・オイスカ村内のグラウンドにて当時事務次長の鶴巻耕介氏より、入社式を執り行っていました。KETについても、入れ替わりで当会を退職される北村さんに叙々苑に呼ばれたと思いきや、能島さん(100%株主のジャイアン)が現れ、そこで開催された(実質)株主総会にて、代表取締役のバトンを握られることになりました。当会が30周年という節目は、KETにとっても10年という節目を意味します。経営しているとはとても言えないレベルの名ばかりのものですが、それでも近年は当会以外の非営利団体・会社さんとの共同でのキャンプも少しずつ増えてきており、年間35キャンプ、1,000人の子どもたちが安心してキャンプに参加できる土台を提供できています。

私自身、2014年当時は大学4年生で、副理事長や事業部の特命担当理事としても活動していました。2008年から2012年ごろにかけての事業拡大期を経て、自主事業拡大の踊り場を迎えた時期です。事業拡大を支えてきた、役割や責任の明確化、目標設定・進捗管理に偏ったマネジメント手法だけでは、これまでのような成果が出せなくなってきていたのがこの頃からだと記憶しています。入職後、これまでのマネジメント手法では学生がどんどん活動を離れていく、そんな状況が長く続きました。今尚、明確な正解は出せていませんが、10年前と変わらない光景が広がっている一方、これまでとはちがった“現在”の学生たちの雰囲気を感じていただけたと思います。

ぜひお待ちしておりますので、すてきな土産を忘れずに、お気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。

## 2015

たなか りょうたろう

### 田中 遼太郎

元・当会こども食堂事業代表  
2017年卒

### こども食堂について

こども食堂事業は、当時6人に1人の子どもが貧困状態にあたると言われ、経済的な理由や家庭の環境から欠食・孤食

の状態にある子どもたちへの支援を目的として始まった活動です。以前より当会では生活困窮世帯への学習支援を行ってきましたが、勉強というツールでは支援が届かない子どもたちへのアプローチ手段として企画されたものです。2014年に当時の総合事業局代表を中心としたメンバーにて立案され、ソーシャルビジネスプランコンペ「edge」へ参加。その後2015年春に正式に当会内で事業立ち上げを行い、立案から1年の月日を経て2015年12月28日に西宮市野間町にあるyoricafeにて「にしのみやこども食堂」をオープンし、今日に至るまで毎週月曜日の活動を続けています。

さて、私自身の話をさせていただくと、こども食堂は中高生時代の私が欲しかった場所でした。中学生の頃に母親を亡くし、1人で食事をとることも少なくなかったあの頃にこの場所があればどれだけ救われただろう。そんな居場所を作りたいとの思いから、前述の代表よりバトンを引き継ぎ、こども食堂事業に携わり始めました。

当時を思い返すと、オープンして数ヶ月は来店者0名という日の方が多く、余ったたくさんのご飯を事務所の大学生たちに配り回るような日々でした(事務所では空腹大学生支援と呼ばれていました)。そんなこども食堂事業が8年以上経った今、子どもたちの集う場所として在り続けていることをとても嬉しく思います。

この活動を支えてくださる支援者の方々、日々の運営に励むスタッフの皆様は心より感謝申し上げます。

にしのみやこども食堂のホームページに「ただそこにいるだけでもいい場所」という言葉があります。私の好きな小説から取った言葉で、こども食堂や居場所としての理想を込めた言葉です。「いるだけ」が許される場所があることで救われる子どもたちがいて、これからもそんな子どもたちに届く居場所であってほしいと願っています。

## 2018

まつもと まなぶ

### 松本 学

当会第2代理事長  
2009年卒

### 理事長交代

神戸市内のゲストハウスで職員合宿をしている時に「理事長交代」についての話が合ったように記憶している。「代

表誰がやる?」という話の中で、年齢が一番上だから松本だよねという絶妙な空気感と、代表にチャレンジしてみたという私の若さが代表就任を後押しした。

その時は、これからの不安よりも、当会で活動をはじめて事業部員から始まり、執行役員、副理事長、事務局長、事業部代表、専務理事、理事長とすべての役職をコンプリートしたなどアホなことを考えていた。

その後、総会で役員構成が承認され、私は、私たちの世代にとって絶対的な存在である能島さんの後任を務めるという運びとなった。

現実に理事長となると、呼ばれ慣れていないこともあるが、これからのことを考えると、当時29歳だった私は、不安と楽しみが混ざったなんとも言えない気持ちだった。

折しもブレイクヒューマニティーの財政状態が下降傾向にあり、学生のたちを取り巻く環境も大きな変化を迎えていたタイミングでもあった。

周囲からは、代表交代を機に様々な変化を期待されていた。「松本らしさ」も求められていた。

就任2年後の2020年からは、新型コロナウイルスの感染拡大という課題にも向き合うこととなった。学生たちの活動の場が制限され、キャンプもキャリア教育も海外ワークキャンプもフレッシュャーズキャンプも新歓もすべてが中止となった。当会が創業時から守ってきた、学生自治や、学生が学生に脈々と事業を引き継いできた文化が途切れてしまう。そんな焦りもあった。

代表就任から6年という月日経った今、振り返ってみると、結果的に当会は根っこの部分は何も変わっておらず、しかし、そのころと比べて大きく進化したように思う。急激な変化を期待されていたあの頃。何かを変えたいが、急激な変化は様々なハレーションを生むため、二の足を踏んでいたあの頃。自分がすべてを背負ってしまったと思いつ込んでいたあの頃。

代表というシンボリックな役割は引き継いだものの、それ以降の大きな進化を生み出したのは、その時間をともに過ごした学生たちであり、そのサポートをした職員たちであり、様々な形でわたしたちを支えてくれた社外のサポーターのみなさんのおかげであったと思っている。

1994年から2024年まで30年、そしてこれからも続くであろうこのブレイクヒューマニティーというコミュニティの中で、今までの時間を紡いだ大学生たち、今、一緒に歩いてくれている大学生たち、これから一緒に歩くであろう大学生たち。

そのすべての人たちに、これからのブレイクヒューマニティーを自慢できるように、この代表交代にきちんと意味を持たせられるように、この時間が終わったときにいい時間だったなと思えるように、これからも進んでいきたいと思う。

## 2019

かたおか かずき

### 片岡 一樹

当会事務局長  
尼崎市立ユース交流センター センター長  
2012年卒

### ユースワークとの出会い

2019年10月1日、尼崎市から指定管理を受けて、市内唯一のユースセンターとして尼崎市立ユース交流センターの運営がスタートしました。当時、入試改革によりセンター試験は終了し、学習指導要領の改訂によって、高校の授業内容は「探求」を軸とした学びへとシフトしていくなど、高校生の環境は大きく変化していた時期だと記憶しています。そのような状況下で将来に対する不安だけではなく、家庭環境や友人関係、学校でのトラブル、自分の発達特性の課題など、この年代だからこその悩みやゆらぎもあります。それらをサポートしようと、当会で一緒に活動していたOBOGに声をかけ、ユースセンターの運営をはじめました。

ユースワークに出会ったのもその頃になります。言葉自体は知っていましたが、よく理解できていなかったため、ユースワークの研修会に参加しました。ユースワークとは、イギリスで始まったユースに関する事業の総称で、「ユースワークは、若者が享楽、挑戦、学習および達成を統合した非公式の教育的活動を通して自分自身、他者および社会について学ぶことを援助する」(全国青少年機関(National Youth Agency, NYA, 2009)だと教えてもらいました。言葉だけではピンとこない部分もあり、ユースワークについて日々学びながら、「やりたいをやろう」をいうキャッチコピーを掲げ、一人ひとりの若者たちが、自分と向き合い、自己実現できる場になるように取り組んできました。

開設して、2024年で4年が経ち、来館者数も延べ12万人を超えました(2024年1月現在)。様々な若者たちの挑戦が生まれてきており、「尼崎にスケートボードパークをつくらう」とまちづくりに乗り出す高校生チームや、校則に納得したいからガイドラインを作してほしいと訴える中学生、父子家庭で育った経験からみんなで食事が食べられる環境をつくらうと中高生食堂を行う高校生など、活動は多岐にわたっています。

「自分が動けば社会は変わるかもしれない」そんな期待が芽生え始めていると感じています。

日本の中で、ユースワークという概念が少しずつ広がってきている一方、ヨーロッパでは、以下のようなことも言われています。

「ユースワークは本質的には社会的実践であり、若者や若

者が生きる社会に働きかけ、若者が地域社会や意思決定に積極的に参画し包摂されることを促進する」(『欧州評議会・閣僚委員会により2017年5月31日に採択された勧告及びその説明のための覚書』(翻訳))

これは当会が掲げるミッションそのものであり、30年もの間、数々の先輩たちが後輩にバトンを引き継ぎながらずっと目指してきたものではないでしょうか。

「若者が成長できる環境をつくと同時に、『若者は社会に影響力を与えることができる』ということ、若者と一緒に社会に示し続けていく」

今、30周年を迎え、社会が大きく変化していく中で、なお「学生主体」に拘る理由がここにあるのではないかと考えています。



## 2020

すぎた はやと

### 杉田 隼

元・当会副理事長兼IM担当理事  
2020年卒

### コロナ禍の学生たち

2020年当時、私は大学4年生で副理事長として、またレクリエーション事業部・学校連携事業部にて活動していました。2020年2月、新型コロナウイルス感染症が大流行し店頭からマスクが消えたころ、常務会にて団体としての対応が議論されました。2020年4月の緊急事態宣言に合わせ、各種イベントが中止になったり新歓をオンラインで実施したりと様々な対応がとられました。7月頃からは定員を50名以内に制限した夏季キャンプやフェイスシールドを着用した状態でのカトリバ事業など、感染対策を十分に行いながら対面イベントが再開されました。また対面でのイベントだけでなくオンラインのイベントも積極的に行われ、学校連携事業部で

は課題探究プログラムを、ワークキャンプ事業部では交流プログラムを実施しました。変化を余儀なくされた当時の当会において、活動する学生の様子も大きく変わっていき

ました。特に大きかった変化が当会での活動意欲や学生ならではのチャレンジ精神の低下です。春～夏にかけて、自身が寝る間も惜しんで準備したイベントが実施できなくなった学生がいたりイベント数が減少したことで活動機会を失った学生がいたり、当会での活動に対してモチベーションを保つことが難しい状況でした。今までと違う環境に四苦八苦しつつも、事業プランコンペやオンライン飲み会などの接点づくりを試みながら「どのような体制であれば実施可能か？」を考え抜き、試行錯誤したことでイベントを再開できました。また事務所への入室が許可制になり、オンラインでの活動がメインになったことで学生同士の関係構築の仕方も大きく変化しました。事務所で他愛ない会話をしたり深夜まで一緒に作業をしたりといった学生同士の絆のようなものを形成する機会が少なくなり、お互いの悩みを共有しどんなことでも相談できる関係性を構築することが難しくなりました。

そんな中でも事業を途切れさせることなく実施できたのは、当時の職員はもちろん学生たちのたゆまぬ努力が大きかったと感じています。オンラインでどんな価値を届けられるのか、本当に参加者は集まるのか、感染症対策をしながらクオリティを維持できるか、などの課題に向き合い実行することは相当の胆力が必要であり、決して簡単なことではありません。まさに「学生だからといってできないことはない」という当会の価値観が現れていたと感じています。

## 2023

すざわ ひろこ  
須澤 寛子

元・当会副理事長  
2023年卒

### 最近の当会の様子

2023年5月の新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、当会は、同年後半頃からコロナ禍以前の活動を再開できるようになったと思います。私自身、コロナ禍の中で学生生活を送っていたので当会のコロナ禍以前の活動を知っているわけではありませんが、以前からの伝統と共に新たな基盤が作られていったのではないかと考えます。

コロナ禍が収束したことで、対面での新入生歓迎パーティーを行ったり、フレッシュャーズキャンプを開催したり、海外ワークキャンプを実施したりすることができました。対面での活動がどんどん増えていく中で、オンラインでのミーティングを行うことで、忙しく過ごす大学生でも、自分のやりたいことに時間を掛けることができたのではないかと思います。

当会に在籍する学生は、関西学院大学だけではなく様々な大学から集まっています。それぞれやりたいことや当会で活動する理由は異なりますが、私は人との繋がりを求めていると思っています。学生発信で運動会を行ったり、事務所でたこ焼きパーティーをしたりと、普段の活動では関わることのない人同士でも、仲良くなるきっかけがたくさんありました。その繋がりが事業部の垣根を超えて活動するようになっていきました。

先輩後輩関係なく仲がよく、雰囲気は温かく、誰かのために一生懸命に時間をかけて向き合うことや、そんな人を全力で応援することは、当会の変わらない魅力の一つではないかと思います。短い学生生活を自分でどのように過ごすのか決め、行動する。やりたいことをとことんやれる環境がとてもありがたいと思います。



# 資料

経営指標(要旨)  
歴代役員・事業部長など  
事業部局の変遷

Document

特定非営利活動法人ブレインヒューマニティー

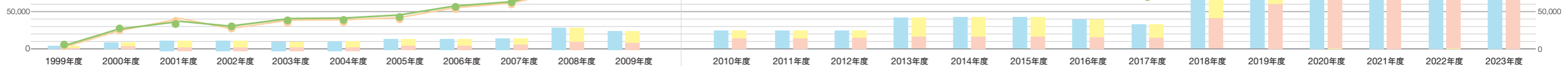


Table with 25 columns (years) and 5 rows (Assets, Liabilities, Net Assets, Income, Expenses) for BrainHumanity.



株式会社YEVIS

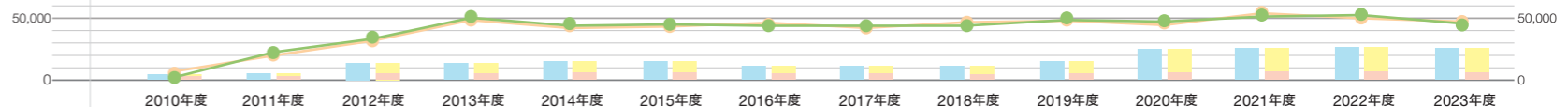


Table with 14 columns (years) and 5 rows (Assets, Liabilities, Net Assets, Income, Expenses) for YEVIS.



公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン

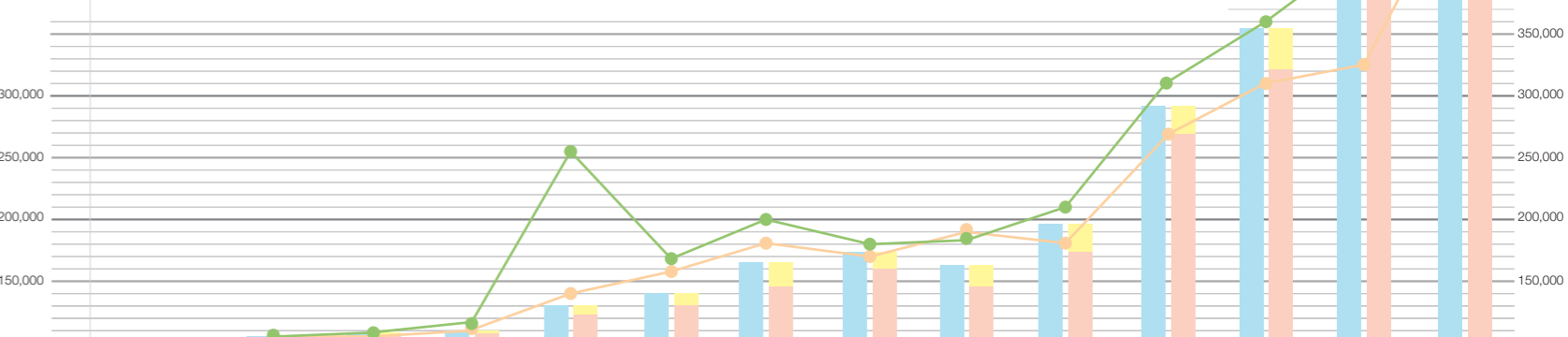


Table with 13 columns (years) and 5 rows (Assets, Liabilities, Net Assets, Income, Expenses) for Chance for Children.

関西教育旅行株式会社

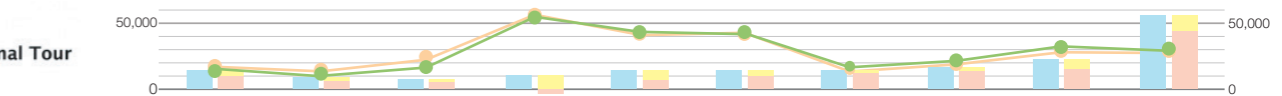


Table with 10 columns (years) and 5 rows (Assets, Liabilities, Net Assets, Income, Expenses) for Kansai Educational Tour.

ブレインヒューマニティーならびに関連企業

経営指標(要旨)

グラフ内容

- Legend for the charts: Assets (blue), Liabilities (yellow), Net Assets (red), Income (green), Expenses (orange).

注釈

※ 年度の表記は、各団体の会計期間による。
※ 単位未満は切捨表示。



関学学習指導会 → プレーンヒューマニティー 歴代役員・事業部長など (敬称略)

Table with columns for 関学学習指導会 and プレーンヒューマニティー, listing members from 1994 to 1999.

2000年度以降は下記に続く

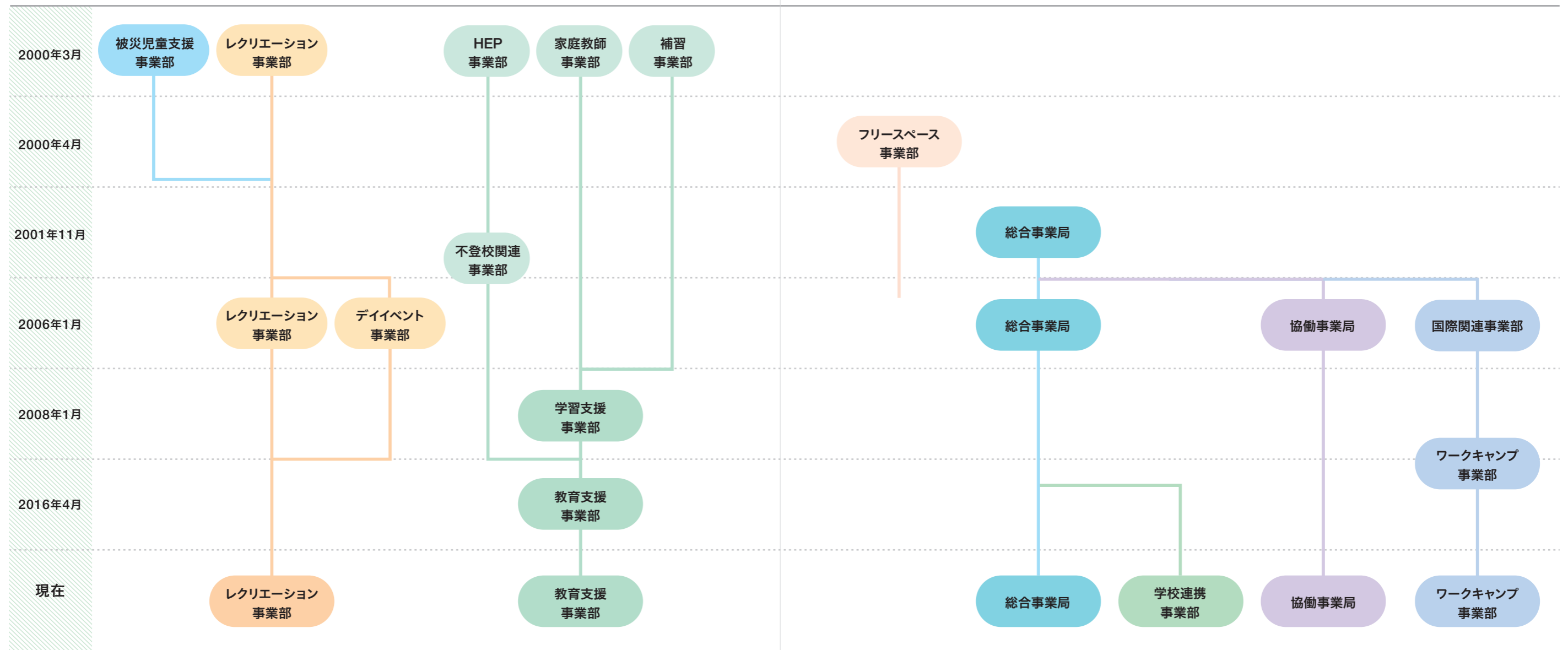
Main table for プレーンヒューマニティー from 2000 to 2009, listing various roles like 理事長, 常務理事, etc.

Main table for プレーンヒューマニティー from 2010 to 2023, listing various roles like 理事長, 常務理事, etc.

注釈

※ 関学学習指導会は残存する資料が乏しく、一部は関係者の記憶に基づく。
※ プレーンヒューマニティーは各年度総会資料と関係者ヒアリングに基づく。

プレーンヒューマニティー 事業部局の変遷



## 編集後記

2023年秋、当会創業者仲間の能島裕介氏から「相談がある」と持ちかけられました。「創立30周年記念誌を作りたい。協力してくれ」とのことでした。

当会は前身団体の発足から、2024年5月1日に創立30周年を迎えました。5周年、10周年、20周年を迎える毎に記念パーティーを開催してきましたが、「記念誌」を発刊していないことを30周年を目前にして初めて気がついた私たち……。発足以来、ミッションの実現に向けて、とにかく右も左もわからず無我夢中で走りつづけてきたあまり、「過去を振り返る」という作業を失念していたのです。

いやはや。能島氏からの要請に気軽に安請け合いました。はたして30年もの記憶と記録を遡ることは可能なのか、当初は心許ない状況で着手しました。しかし、当会の「総会資料」がそれを支えてくれました。毎年の定期総会資料が揃っており、経営数値や会議の内容、執行した事業、人事などを網羅していたのです。

まずは、NPO法人化後24年分の総会資料に目を通し、執行した事業すべてを一覧化しました。しかし、前身団体における活動については資料がほぼ残存せず、大藤泰生氏が当時作成していた年表が救いでした。これらを整理した結果、30年間にわたり当会が執行した事業は、実に1500超でした。そこから体系的に整理・集約し、年表の完成に至りました。改めて30年間の重みを感じました。

過去に撮影された数多くの写真にも目を通し、誌面の許される範囲で掲載させて頂きました。キャンプやレクリエーションの度に市販の使い捨てカメラを多用していた頃から、いつからかデジタルに。こんなところにもまた、30年という歴史を感じました。

また、当会卒業者、関係者の皆様には、当会で活躍された当時を振り返るご寄稿を賜りました。厚く御礼申し上げます。

内容につきましては厳重にチェックを重ね、総力を挙げて編集に取り組み、万全を期したつもりではありますが、書き足りない点、調査が足りない点もあろうかと存じます。何卒ご容赦ください。

多々至らぬ点があるなか、近藤隆己様には校正を、横川沙希子様にはデザインをお願い申し上げ、大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

当会は、これからも学生たちが中心となって、活動を展開してまいります。どうぞご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

本記念誌が皆様方の当会に対する一層のご理解につながるものとなりますことを希望いたします。

創立30周年記念誌編集委員会

委員長 濱村 直之

(関学学習指導会 初代理事長、  
ブレインヒューマニティー同窓会 会長)



名称 特定非営利活動法人ブレインヒューマニティー

目的 青少年及びそれに関わる個人法人その他団体等に対し青少年が自己認知し、自分らしく生きるための支援を行い、もって広がりのある社会の創造に寄与することを目的とする。

特定非営利活動の種類 (特定非営利活動促進法第2条第1項に基づく活動の種類)

1. 社会教育の推進を図る活動
2. 文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動
3. 環境の保全を図る活動
4. 国際協力の活動
5. 子どもの健全育成を図る活動
6. 前各号の活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

特定非営利活動に係る事業の内容

1. 青少年に対する総合的な学習指導事業
2. 青少年に対する家庭学習支援事業
3. 青少年に対する文化学習指導事業
4. 青少年の国際交流に係る企画立案事業
5. 青少年に対するスポーツレクリエーション事業
6. 青少年等のコンピューターネットワーク構築事業
7. 青少年に関わる人材育成の事業
8. 青少年に対する青少年等の活動に係る相談及び支援の事業
9. その他、目的を達成するために必要な事業及び前各号の事業に付帯する事業

設立 1994年5月1日(任意団体設立)  
2000年3月1日(法人設立認証・同日登記完了)

所轄庁 兵庫県知事

事務所 ○本部事務局  
〒662-0832 兵庫県西宮市甲風園1丁目3番12号 カミヤビル3階  
TEL: 0798-63-4441 FAX: 0798-63-5551  
<https://www.brainhumanity.or.jp>

○尼崎事務局  
〒661-0953 兵庫県尼崎市東園田町3丁目31-3

○神戸連絡事務所  
〒658-0047 兵庫県神戸市東灘区御影3丁目2-11-177  
TEL: 078-843-8849

## ブレインヒューマニティー 創立30周年記念誌

発行日 : 2024年11月30日  
発行者 : 特定非営利活動法人ブレインヒューマニティー  
編集 : ブレインヒューマニティー 創立30周年記念誌編集委員会  
濱村 直之 / 能島 裕介 / 田中 章雅 / 川中 大輔 / 松本 学 / 片岡 一樹 / 久米 凜太郎  
年表記事執筆 : 鶴巻 耕介  
アドバイザー : 近藤 隆己  
デザイナー : 横川 沙希子

※本誌を無断で複写・複製することを禁じます。